

2018 年度 修士学位審査請求論文

日本語と満州語の与格の対照研究

LIU Qingling

7212170013-2

立命館大学大学院言語教育情報研究科

2018 年度

1.はじめに

日本語と満州語の格は様々な点でよく似ていると考えられるが、両言語の格に関する対照研究はまだない。本稿は、満州語と日本語の与格の意味・用法を中心に対照研究を行う。

日本語の「に」に関する先行研究が進んでいる一方で満州語の「**de**」に関する先行研究は少ない。しかも、大まかな説明が多い。そこで先行研究をまとめるとともに、『清文啓蒙』、『満州実録』などの満州語の文献から「**de**」を抽出し、具体例に基づいて母語話者に協力を仰ぎ、「**de**」の意味用法を明らかにする。

日本語の「に」と満州語の「**de**」の意味・用法を一つ一つ比較し、両者の共通点と相違点を全般的に研究する。そして、認知的・機能的な文法研究で使用される意味地図 (**semantic map**, **Haspelmath 2003**) を活用し、最終的には意味俯瞰図を作り、二つの言語の与格の意味領域のあり方を明らかにしたいと考える。中村・佐々木・野瀬(2015)によると、意味地図とは、実際の地形を地図に示すように、意味や機能同士の結びつきを地図のように視覚化しようと目指したものである。具体的には、2.1 節で紹介する。

津曲(2002)によると、満州語は、系統的にも構造的にも中国語と全く異なり、いろいろな点で日本語によく似た言葉である。通言語的な意味地図を通じて、「に」と「**de**」の対照の研究をし、日本語と満州語の与格に関する包括的な認識を得ることによって、両言語の系統論・言語類型論などの領域の研究にも貢献できると思う。

また、満州語は清朝の公用語として隆盛をきわめたが、今では満州語の話者も極めて少なく、消滅の危機に瀕する言語となった。この研究は、言語の多様性などに対する研究にも一参考が得られるだろう。

2.先行研究

満州語と日本語の与格の対照に関する先行研究はあまりない。本稿では言語の対照方法に関する研究、日本語、満州語それぞれの与格に関する研究を参照している。本章は研究方法、日本語の「に」、満州語の「**de**」の三つの部分から構成される。

2.1 研究方法に関する先行研究

両言語の与格に関する研究はないが、それぞれ他言語との対照研究がある。哈(1998)は満州語の位格接辞とモンゴル語の与位格接辞の意味・用法の異同をまとめた。満州語の位格接辞(与格標識)とモンゴル語の与位格接辞の用法を分かりやすく説明したが、7つの用法しか分析していないので、分析は十分ではないと考える。

朴 (1997)は日本語の「に」の 16 種の意味用法と韓国語の E・EGE の 10 種の意味・用法を一つひとつ比較している。非常に参考になるが、いくつかの意味役割の分類について疑問がある。例えば、存在場所と所有者を同一の意味役割と見なすのには問題があると筆者が考える。この問題については 3 章で詳しく説明する。二つの言語の与格の意味領域のあり方を全面的に分析するため、本稿ではさらに細かい分類を提案する。たとえば、朴(1997)が「動作・態度・感情の対象」に分類する意味・用法を「受け手」、「行為の対象」、「感情の対象」、「受益者」に分けて分析した。

また、これらの先行研究はそれぞれ扱っている二つの言語の与格標識の共通する用法と異なる用法をまとめただけで、最後にはどの言語どのような特徴があるか全体的な傾向の指摘がない。そこで、本稿は Haspelmath (2003) が提案した意味俯瞰図の考え方を導入したいと考える。通言語的な意味地図を通じて、言語間の対照研究を行うことができる。具体的な意味・用法の異同を意味俯瞰図で表すことで、各言語の与格標識の特徴とそれぞれの偏りをはっきり見て取れる。

Haspelmath (2003) は与格の意味地図を図 1 のように描き、そして英語とフランス語の与格を例として、意味俯瞰図における言語間の対照方法を説明した。英語の与格標識「to」とフランス語の与格標識「à」の使用範囲を与格の地図で表示した。それぞれ図 2、図 3 で示す。図 2、図 3 を見ると、フランス語の「à」は「目的 (purpose)」の用法がないが、英語の「to」にはあり、「叙述的所有者 (predicative possessor, vous êtes à moi の à moi)」の用法がフランス語にはあるが英語にはないことがわかる。

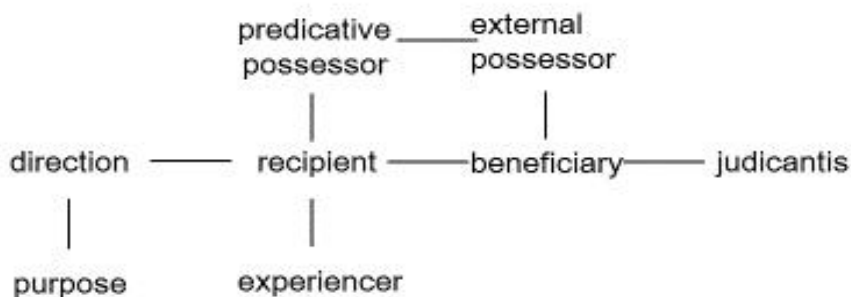


図 1. 与格の意味俯瞰図 (Haspelmath 2003 より)

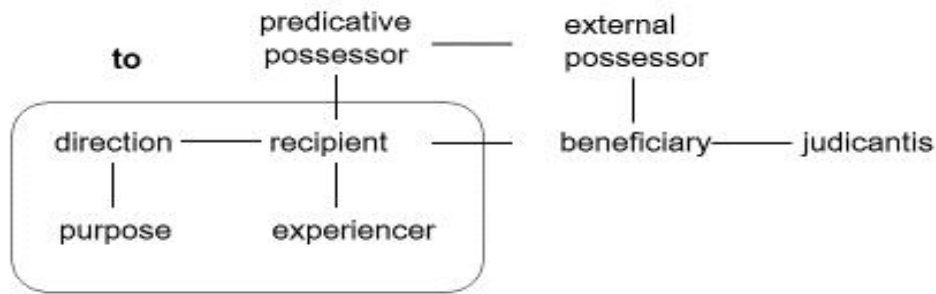


図 2. 与格の意味俯瞰図による英語の「to」の使用範囲 (Haspelmath 2003 より)

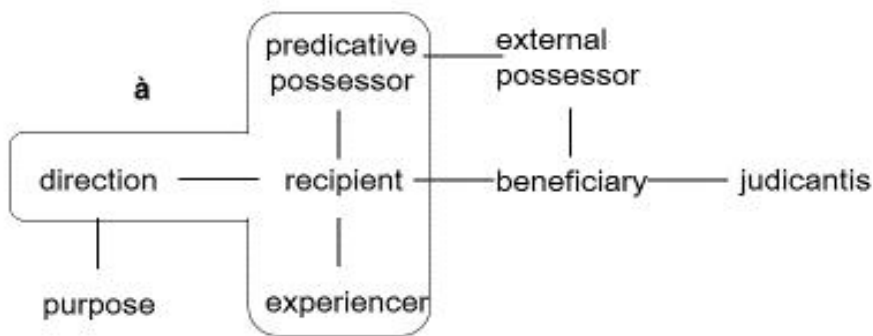


図 3. 与格の意味俯瞰図によるフランス語の「à」の使用範囲 (Haspelmath 2003 より)

Sasaki and Caluianu (2009)は図 1 に基づき、日本語の「に」意味俯瞰図を図 4 のように提案した。改良した意味地図には方向性とできごと性を備え、より詳しいものになっている。Sasaki and Caluianu (2009)はこの意味俯瞰図を利用し、日本語の標準語の与格と水海道方言の斜格(図 5)の対照研究を行った。

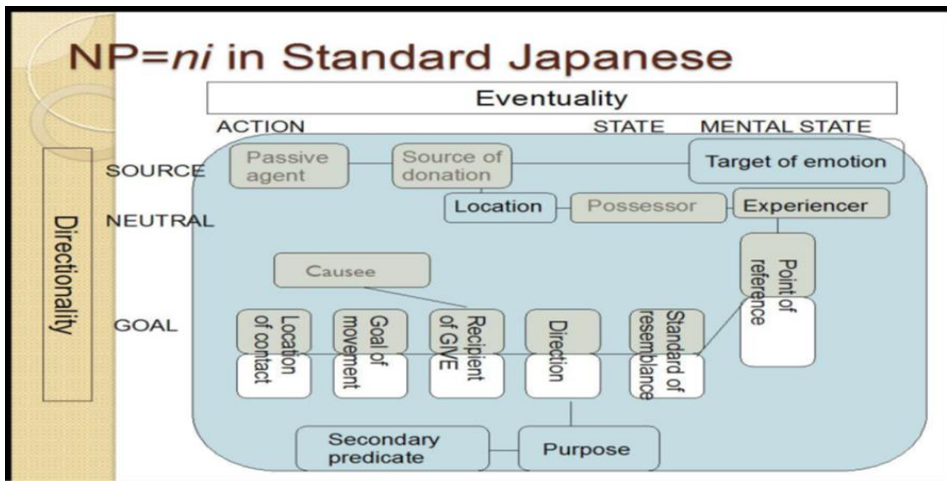


図 4. 日本語の「に」の意味俯瞰図 (Sasaki and Caluianu 2009 より)

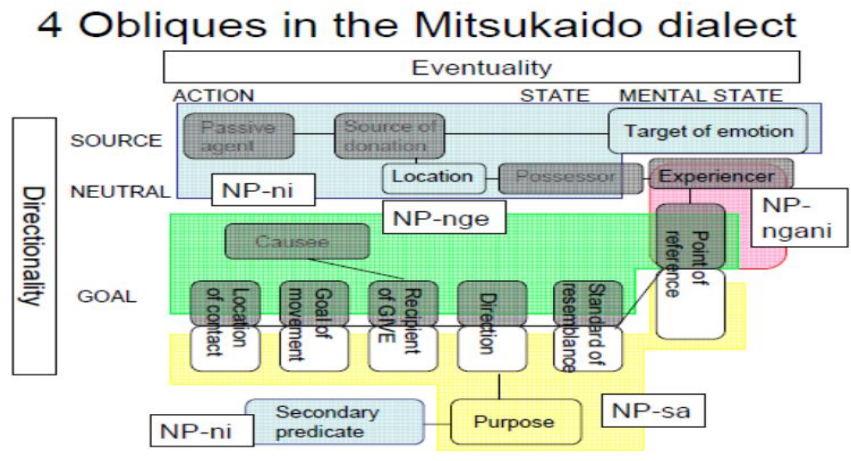


図 5. 水海道方言の斜格の意味俯瞰図 (Sasaki and Caluianu 2009 より)

そして、Haspelmath (2003) はフランス語とロシア語の再帰構文を研究する時、両言語の再帰構文がカバーする範囲を同じ地図で表示し(図 6)、対照研究を行った。二つの言語を一つの図でマークすると、各言語の傾向がよく見えると思う。この研究方法を活用し、本稿は図 4 の日本語の「に」の意味地図を補充・修正した上で、満州語の「de」の意味・用法を付け加え、最終的には両言語の与格の意味俯瞰図を作り、対照研究を行う。

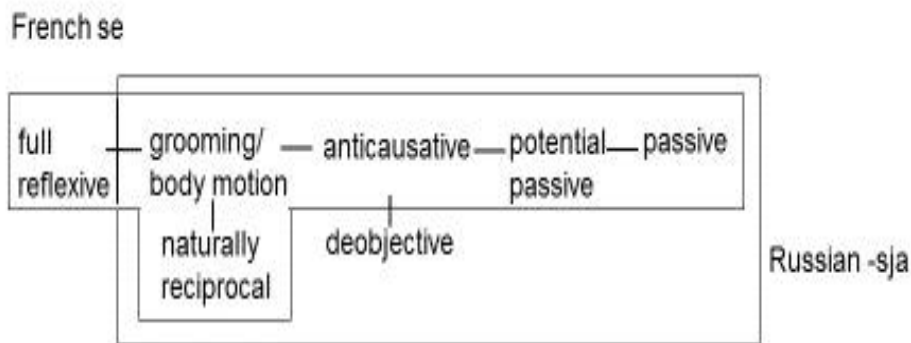


図 6.再帰と中間態の意味俯瞰図(Haspelmath 2003 より)

2.2 日本語の「に」に関する先行研究

本節は、「に」の具体的な用法を記述した研究と「に」の用法を構造化した研究に分けて紹介する。

2.2.1「に」の具体的な用法を述べる研究

日本語の「に」は多様な意味・用法を持っていて、「に」の細かい用法をまとめ、例文を挙げてその使い方を示す先行研究も少なくない。このような研究として、日本語記述文法研究会(2009)、益岡・田窪(1987)、国立国語研究所(1997)、姜・胡(2005)、Rice and Kabata (2007)、森山(2008)などを挙げることができる。

これらの先行研究は「に」が表す意味・用法の範囲に対する把握はそれほど差がないが、意味役割の分け方については若干の違いがある。例えば、森山(2008)が、「空間的基点」、「抽象的基点」に分類した「に」の使い方は Rice and Kabata (2007)によって「参照空間(REFERENCE SPACE)」に分類されている。一方、Rice and Kabata (2007)が「比較(COMPARATIVE)」、「参照空間(REFERENCE SPACE)」に分類した「に」の使い方は、丸山(2016)によって「基準としての相手」に分類されている。また、日本語記述文法研究会(2009)が分類した「動作の対象」、「心的活動の対象」に分類した「に」の用法は国立国語研究所(1997)によって「対象(行為・思考・感情)」に分類される。

本稿はこれらの先行研究の成果を踏まえ、意味論・認知類型論の角度から両言語の与格助詞の意味役割を整理して細分化する。具体的な分類方法について、3章以降で例文を持って、分類の仕方と根拠を説明する。

2.2.2「に」の用法を構造化した研究

「に」の様々な意味役割の中に、ある共通する性質を持つものを一定のルールでいくつかのグループに分類し、「に」の意味・用法を構造的に示す先行研究として杉村(2005)、岡(2007)、森山(2008)、日本語記述文法研究会(2009)、丸山(2016)などが挙げられる。以下は用法間の関係の捉え方の深さを基準にして先行研究を分類し紹介する。

丸山(2016)はいくつかの先行研究の重なる部分をまとめた上で、日本語記述文法研究会(2009)の表を修正し、以下の枠組みを主張した。

場所—存在の場所、主体(所有の主体、能力の主体、心的状態の主体)

—領域、割合

着点—移動の着点(到達点、接触点)、変化の結果

相手—動作の相手、与え手、受身の相手、使役の相手、基準としての相手

対象—動作の対象、心的活動の対象

起因・根拠

手段—内容物、付着物

内容規定

目的規定—目的、役割

様態規定

時

丸山(2016)は、「に」の用法を詳細にまとめ、非常に参考になる。だが、この枠組みは「に」の意味用法をおおざっぱに10個に分けるだけで、その分類は十分ではないと考える。例えば、「時」、「起因・根拠」は一番上の「場所」に分類することができ、「与え手」、「受身の相手」は「動作の相手」などと方向性の違いがあるため、同じグループに入れることが適切ではないと思われる。

杉村(2005)では、以下の分類を提案している。

- ①存在の場所・時点— 存在する場所(位置)、所有者、能力の主体、時間(時点)、距離的な位置
- ②一方性を持った動きの着点— 位置変化の着点、移動の着点、目的、変化の結果、行為の相手、働きかけの対象、受益者、恩恵の受益

者、比較の基準、精神行為の相手、随伴の対象、
行為の対象

③被動的行為の動作主— 受身の対象、授与者、恩恵の授与者、原因

この分類は日本語の「に」の用法の大半を含み、また筆者もこの分類の上位になる三つの大きな意味役割を「に」の一番中心的な用法(「位置」、「着点」、「動作主」)であることに賛成する。だが、その分類の仕方には賛成できないところもある。例えば、精神行為の相手は着点ではなく、起点である。比較の基準は着点とは言えない。具体的な理由については3章以降で詳しく説明する。また、各意味役割の関連性も杉村(2005)では示していない。

岡(2007)の主張は以下の意味ネットワークにまとめられる。

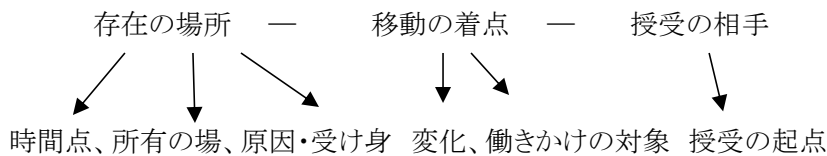
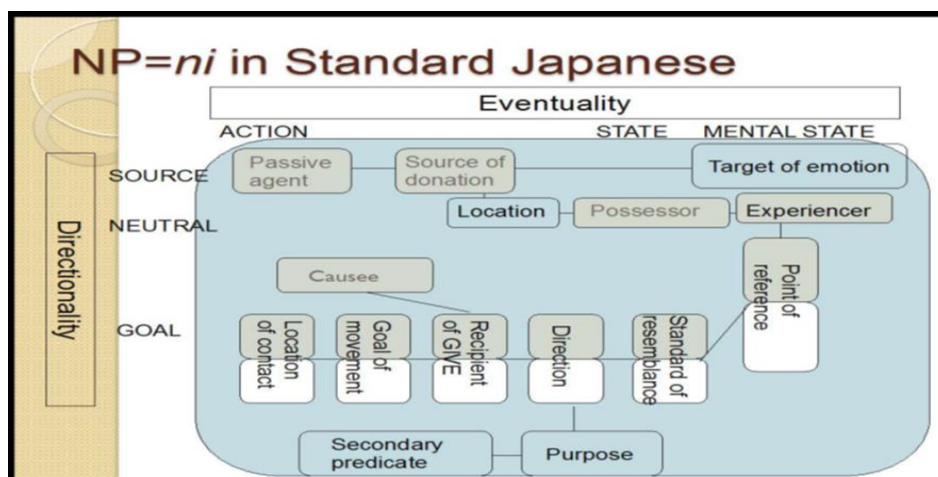


図7. 「に」意味ネットワーク(岡 2007 により)

このネットワークはいくつかの小さい意味役割を大きな意味役割にまとめただけでなく、大きな役割の間も線で繋いで関係を示したものである。一定の関連性と階層を示しているが、まだ不十分だと考える。下位にある各意味役割も独立しているものではないと筆者は考える。また、筆者はこの意味ネットワークの何箇所かに異議がある。例えば、「授受の相手」も「移動の着点」と同じ着点にまとめられると考えられる。また、「授受の起点」が「授受の相手」に属することにも支持できない。

2.1 節の研究方法に関する先行研究のところでも述べたように、Sasaki and Caluianu (2009)は「に」の意味・用法を以下の意味地図で表す。



(図 4. 日本語の「に」の意味地図 Sasaki and Caluianu 2009 より)

この意味地図では、各意味役割の所在の領域の違いによって、その意味役割がもっている性質を示すことができる。この地図の一番左上にある「受動文の動作主(Passive agent)」を例として説明すると、縦の方向性を表す軸から見れば、上のところにあるので、この意味役割が起点性を持っていることを示している。また、横のできごと性を表す軸から見れば、左の動作の領域にあるので、この意味役割が高い動作性を持つことが分かる。この上、各役割の間には線で繋がって、関連性を示している。「に」の詳細はこの地図で収められ、非常にわかりやすいと考える。

しかし、この意味地図に含まれる「に」の意味・用法はまだ全面とは言えないと考える。また、いくつかの意味役割の位置づけについては異論がある。本稿は、図 4 の「に」の意味地図を修正し、直したものを提案し、満州語だけが持つ用法を付け加え、最終的には日本語と満州語の与格の意味俯瞰図を提示する。

2.3 満州語の「de」に関する先行研究

満州語の格助詞に関する先行研究は少ない。そして、大雑把な説明が多い。「de」の用法を概略的にまとめたのは、上原(1960)、季・劉・屈(1986)、河内(1996)である。

上原(1960) は『満州実録』の中の「de」の使用頻度と主な用法をまとめ、「行動の行われる時空の位置関係、行動の間接的対象関係、行動の行われる手段」と述べている。季・劉・屈(1986)は「de」の用法について、方向格、位置格、道具格と述べている。河内(1996)は「de」の用法と位格、具格と述べている。

「de」の具体的な用法を述べたのは、哈(1998)、Gorelova (2002)、金・鳥(1998)である。

哈(1998)は「de」の意味・用法について、動作の行われる場所・時間、受け手、受動文の行為者、原因、対象、道具・材料と述べている。哈(1998)の「de」に関する説明はわかりやすいが、いくつかの典型的な用法しかあげていない。

Gorelova (2002) は「de」の意味・用法について、受け手、受け身、所有者、位置、終点、目的地、時間点、空間的範囲、時間帯、期限、感情の対象、様子、原因などと述べている。Gorelova (2002)は「de」の使い方をより詳しく紹介したが、体系的に分類していない。間違っている論述もある。この問題については3章で詳しく説明する。

金・鳥(1998)は以下の分類を主張している。

- ①時間の位置関係——時間点、期間
- ②空間の位置関係——場所、方向・目的・傾向、所有者
- ③人事的位置関係——対象、受動文の動作主、
- ④動作の原因・根拠——原因、根拠

金・鳥(1998) は「de」の意味・用法をより体系的に分類したが、4つの大きなグループに分けただけで、その中の関連性などを深く追求していない。また、参照点、受益者などの細かい用法も含まれていない。

本稿はこれらの先行研究を参考にするとともに、『清文啓蒙』、『満州実録』などの満州語の文献から「de」の例文を抽出し、日本語の「に」と対照しつつ、母語話者に協力を仰ぎ、「de」の意味用法を明らかにする。

3.日本語と満州語の与格の共通点と相違点

日本語と満州語の与格名詞句の用法を、共通する用法と一方だけにある用法に分けて示す。満州語の例文と日本語訳は以下の資料検索システムから引用するものが多い。(注:引用した例文の日本語訳を少し直したことがある。)

「モンゴル諸語と満州語の資料検索システム」:

<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/manchu/list?groupId=11>

この資料検索システムは、東北大学東北アジア研究センターが作ったものであり、『清文啓蒙』、

『尼山薩滿』、『満洲実録』、『老乞大』、『一百条』という五つの満州語文献のローマ字転写と日本語の翻訳を備えている。満漢大辞典、新満漢大詞典などの満州語辞書データも提供している。以下は、文献の詳細とその貢献者の紹介である。なお、この紹介自体は上記のサイトからの引用したものである。

『清文啓蒙』

神戸市外国語大学の竹越孝先生の『兼満漢語満洲套話清文啓蒙一翻字・翻訳・索引一』(神戸市外国語大学研究叢書 49、神戸市外国語大学外国学研究所、2011)の満洲語のローマ字転写、日本語訳、漢語翻刻テキスト。

『尼山薩滿』

満洲族の口承文芸「*nišan saman i bithe*(ニシャン・サマンの書)」の満洲語ローマ字転写と日本語訳のテキスト。日本語訳は、河内良弘「ニシャン・サマン傳 譯注」(『京都大学文学部研究紀要』26、1987、141-230 頁)によっている。

『満洲実録』

乾隆 46 年(1781 年)に編纂された満洲語・漢語・モンゴル語対訳の『満洲実録』の満洲語のローマ字転写テキスト。

『老乞大』

清の乾隆 30 年(1765 年)刊の『清語老乞大』の満洲語ローマ字転写と日本語訳テキスト。日本語訳は、津曲敏郎「清語老乞大の研究—満州語研究のための一資料(1)」(『札幌商科大学・札幌短期大学論集(人文編)』21、1977、211-248 頁)、津曲敏郎「清語老乞大の研究—満州語研究のための一資料(2)」(『札幌商科大学・札幌短期大学論集(人文編)』22、1978、161-193 頁)を参照した。

『一百条』

清朝時代に木版で出版された満洲語の学習書「*tanggū meyen*(一百条)」の満洲語ローマ字転写と日本語訳テキスト。日本語訳は、浦廉一、伊東隆夫「TANGGŪ MEYEN(清話百条)の研究」(『広島大学文学部紀要』第 12 号、1957、75-277 頁)によっている。

出典の文献の略号は以下のとおりである。

『清文啓蒙』:SBKM、『尼山薩滿』:NSSM、『満洲実録』:MSZR、『老乞大』:RQD、

『一百条』:YBT、『満漢大辞典』:MHDCD、『新満漢大辞典』:XMH

この資料検索システムに載っている資料以外に、先行研究からも一部の例文を引用した。略号は著者と出版年で示す。例えば、「(金・鳥 1982) (朴 1997)」など。¹

また、対照を行う際の便宜を考慮し、資料検索システムにある満州語の例文と日本語訳に加えて、逐語訳・形態素分析を付けた。河内(2002)によると、「de」などの格助詞は、単独で書かれる場合と前の綴りに接続して書かれる場合がある。前の綴りと接続して書かれるのは普通前の綴りが母音で終わる場合であるが、例外もあるという。形態素分析をする時、接続して書かれる格助詞と前の綴りの間にハイフンを付けた。例:jaka-de

物-与

3.1 共通する用法

まずは、日本語の「に」と満州語の「de」に共通して見られる用法を紹介する。満州語の「de」と日本語の「に」は、受け手のような与格に典型的な意味役割だけでなく、様々な意味役割で用いられる。以下に、受け手、受動文の動作主、被使役者、感情の対象、原因、存在位置、時間点、比較の基準、参照点、接触点、方向、移動の目標、目的、受益者、行為の対象、様態の例を示す。

①受け手

例文(1)~(6)は与格の典型的な用法—「受け手」を表す例文である。太字になった部分は両言語の与格助詞である。例(1)、(2)は日本語の「に」が「受け手」としての「子供」、「弟」をマークする用法である。例文(3)~(6)は満州語の「de」が名詞「人」「私」「あなた」などの名詞・人称代名詞の後ろにつき、授受動作の「受け手」をマークする例文である。この意味役割を表す時、「de」と「に」は同じように使われている。

日本語:

(1) 子供に与える。

(2) 弟に本をやる。

満州語:

(3) atanggih niyalma **de** ba bumbi-he. (SBKM44-14)

いつ 人 与 所 与える-過去

¹ 日本語以外の言語で書かれた先行研究から引用した例文の日本語訳は筆者が翻訳したものである。例文の最後で表明した。

「いつ人に所を与えていた。」

(注:ここの「所を与える」は人に「余地・安心立脚の地を与える」の意味である。)

(4) age si min-**de** bu-mbi se-he bithe absi oho seme fonji-ha de.

兄 君 私-与 与える と言う-過去 書 どう なった と 尋ねる-過去 与

「兄君が私に与えると言った書はどうなったと尋ねたので。」(SBKM77-24)

(5) bi sin-**de** emu sain arga tacibu-re. (YBT010:16)

私 貴方-与 一つ よい 方法 教える-未来

「私は貴方に一つのよい方法を教えよう。」

(6) sin-**de** juwe yan menggun-be bu-ki. (LQD6:055)

貴方-与 二 両 銀-対 やる-希望

「おまえに二両銀をやろう。」

②受益者

例文(7)~(11)は与格助詞が「受益者」を表す用法である。太字になった部分は両言語の与格助詞である。例(7)は日本語の「に」が「受益者」である「子供」をマークする例文である。例文(8)~(11)は、満州語の「**de**」が名詞「大貝勒」、「私たち」「あなた」などの人称代名詞の後ろにつき、動作の「受益者」をマークする例文である。この意味役割を表す時、「**de**」と「に」は並行的である。

日本語:

(7) 子どもに読んでやる。

満州語:

(8) amba beile **de** bu-fi sarila-me gai-ha, (MSJR 7-73:6)

大 貝勒 与 与える-連用 宴を設ける-連用 娶る-過去

「大貝勒に與へ酒盛を設けて娶りたり」

(9) men-**de** orin jiha sali-re nure-be tebu-fi gaju. (LQD4:107)

我々-与 二十 銭 値する-連用 酒-対 容れる-連用 持参する-命令

「我々に二十銭分の酒を容れて持って来い。」

(10) uttu oci sin-**de** sain menggun-be forgoSo-me bu-fi uda-ki.

これ なら おまえ-与 良い 銀-対 とり替える-連用 やる-連用 買う-希望

「これならおまえに良い銀をとり替えてやって買おう。」(LQD 8:063)

(11) gida jangkv be men-**de** ga-ji-∅. (MSZR1-137)

槍 器械 対 吾等-対 持-來-命令

「槍、器械を吾等に持ち來よ。」

③方向

例文(12)~(14)は与格助詞が「方向」を表す用法である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例(12)、(13)は日本語の「に」が「人がいる方向」、「西という方角」をマークする例文である。例文(14)は、満州語の「**de**」が「厨子のいる方向」をマークする例文である。この用法も「**de**」と「に」は並行的である。

日本語:

(12) 刃物を人**に**向けるな。

(13) 西**に**向かう道が夕日に照らされる。

満州語:

(14) *cecei erhuweku **de** foro-me fucihi de dorolo-ho.* (XMH284a)

紗-属 厨子 与 向かう-連用 仏神 与 礼を行なう-過去

「紗の厨子に向かつて仏神に礼を行なった。」

④移動の目標

例文(15)~(17)は与格助詞が「移動の目標」を表す用法である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例(15)、(16)はそれぞれ日本語の「に」が「移動の目標」である「学校」、「港」をマークする例文である。例文(17)は、満州語の「**de**」が「移動の目標」である「下」をマークする例文である。この意味役割を表す時、「**de**」と「に」は並行的である。

日本語:

(15) 学校**に**行く。

(16) 船が港**に**向かう。

満州語:

(17) *wargi **de** gene-mbi.* (MSZR1-150: 5)

下 与 行く

「下に行く。」

⑤目的

例文(18)~(21)は与格助詞が「目的」を表す用法である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例(18)、(19)はそれぞれ日本語の「に」が「目的」である「買い物」、「映画」をマークする例文である。例(20)、(21)満州語の「**de**」が「目的」である「葬儀」、「書道をする」をマークする例文である。この意味役割を表す時、「**de**」と「に」は並行的である。

日本語:

(18) 買い物**に**行く。

(19) 映画を見**に**行く。

満州語:

(20) si jobolon **de** acana-ha-o akv-n. (SBKM63-10)

君 葬儀 与 訪ねる-過去-疑問 ない-疑問

「君は葬儀に訪ねたか否か。」

(21) ere fi be amba hergen ara-ra **de** baitala-mbi.

この ペン 対 大きい 字 書く-連体 与 使う

「このペンは書道をするために使う。」

⑥接触点

例文(22)~(25)は与格助詞が「接触点」を表す用法である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例(22)、(23)はそれぞれ日本語の「に」が「接触点」である「服」、「壁」をマークする例文である。例文(24)、(25)は、満州語の「**de**」が「接触点」である「枕」、「首」をマークする例文である。この用法も、「**de**」と「に」は並行的である。

日本語:

(22) 糸くずが服**に**つく。

(23) 壁**に**カレンダーを貼る。

満州語:

(24) jing cirku **de** nike-fi jaka jeku je-me bi. (SBKM95-19)

ちょうど 枕 与 倚りかかる-連用 食物 食べる-連用 いる

「ちょうど枕にもたれ食物を食べている。」

(25) loho aifini monggon **de** sindaha. (SBKM54-28)

刀 すでにくび 与 放つ-過去

「刀をすでにくびにあてがった。」

⑦行為の対象

例文(26)~(29)は与格助詞が「行為の対象」を表す例文である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例(26)、(27)は日本語の「に」が「行為の対象」である「大学」、「恋人」をマークする用法である。例文(28)、(29)は満州語の「de」が「恩」、「薬」などの「行為の対象」をマークする例文である。

日本語:

(26) 大学に合格する。

(27) 恋人に会う。

満州語:

(28) gemu ejen i kesi **de** ba-ha-ngge. (SBKM 21-12)

みな 天子 属 恩 与 受ける-過去-連体

「みな天子の恩を受けたもの。」

(29) cara aniya bi okto **de** endebu-fi, (SBKM 98-8)

一昨年 私 薬 与 間違う-連用

「一昨年私は薬を間違って」

「行為の対象」をマークする場合、「de」と「に」はほぼ同じように使われている。だが、日本語記述文法研究会(2009)によると、「に」がこの意味役割を表す時、述語は「逆らう」、「はむかう」、「賛成する」、「反対する」、「勝つ」、「負ける」、「合格する」などの方向性を持つ動詞が来る。満州語の「de」にはこの制限がない。

⑧感情の対象

満州語の「de」と日本語の「に」は「行為の対象」だけではなく、例文(30)~(34)に示すように「感情の対象」を表すこともできる。⑦、⑧を一つの意味役割「対象」として捉える先行研究もあるが、本稿は出来事性、方向性などの角度から両言語の与格を包括的に分析・対照するため、二つの意味役割に分けて考察する。その理由は 4.2 で詳しく説明する。

両言語の与格助詞は太字で表示される。例(30)、(31)は日本語の「に」が「感情の対象」である「騒音」、「お母さん」をマークする用法である。例文(32)、(33)、(34)は満州語の「de」が「露」、「軍事」、「本」などの「感情の対象」をマークする例文である。

この場合、「de」と「に」に続く動詞は「困る」、「恐がる」、「憎む」などの感情・心理的な意味を表す

動詞である。与格助詞の前に来る体言としては、人も、物事も来る。

この用法も「de」と「に」は同じように使われている。ただし、満州語には、与格助詞の後ろに後置詞が来る場合もある。例(34)が示すように、与格助詞「de」に随意後置詞 **amuran** (「～が好きな・～好み」の意味)を後接し、「好き」という「感情」を表す。だが、「～**de amuran**」は一種の固定した組み合わせとして使われ、このような表現は多くない。

日本語:

(30) 騒音に困る。

(31) 妹はお母さんに甘えている。

満州語:

(32) **silenggi de gele-rakv se-he kai.** (SBKM91-26)

露 与 恐れる-否定 と言う-過去 ぞ

「露を恐れないと言ったぞ。」

(33) **cooha dain de umesi ise-hebi.** (XMH459b)

戦い 兵隊 与 とても 憎む-過去進行

「軍事をととても憎んでいる。」(訳は筆者)

(34) **bithe de amuran.** (YBT037:16)

本 与 好み

「本を好み。」

⑨受動文の行為者

以下の例文(35)~(38)に示すように、日本語と満州語の受動文では能動文の主語に対応する受動文の要素が与格でマークされる。両言語の与格助詞を太字で表示する。

例(35)、(36)は普通「動作主」とされている。だが、例(37)、(38)においては、受け身表現の主体は無生物・自然現象であるため、「動作主」と言いにくいと思われる。ここで、「行為者」の言い方を導入したい。フィルモア(1975)などの初期格文法理論でなどの初期格文法理論で意味役割の概念を提案した。これに対して、Foley and VanValin (1984)はマクロロールという一般的意味役割の概念を提示した。

Foley and VanValin (1984:29)はマクロロールを行為者(actor)と受動者(undergoer)に分けている。それぞれの定義は以下の通りである。

行為者(actor): the actor a predicate which expresses the participant which performs, effects, instigates, or controls the situation denoted by the predicate.

受動者(undergoer): the undergoer expresses the participant which does not perform, initiate, or control any situation but rather is affected by it in some way.

例(37)、(38)のような、無生物・自然現象である受け身表現の主体も行為者 (Actor) の定義に即している。中村・佐々木・野瀬(2015)はこの概念を活用し、日本語の与格助詞「に」の格標識としての意味タイプを研究する時、能動文の主語に対する受動文の要素を「受動文の行為者」と名付けている。本稿もこの概念を取り入れる。

こうすれば、受動文における意志性(volitionality)を持っている動作の実行者を指す「動作主」と意志性のない無生物である実行者が含まれる。日本語と満州語の与格は「受動文の行為者」を表せる。

日本語:

(35) 先生に叱られた。

満州語:

(36) niyalma **de** kundule-bu-he. (SBKM99-22)

人 与 尊敬-受動/使役-過去

「人に敬われた。」

(37) uthai tuwa **de** fiyakv-bu-ha adali. (SBKM87-21)

まるで 火 与 焙る-受動/使役-過去 ようだ

「まるで火に炙られたようだ。」

(38) tuttu seme aga **de** usihi-bu-he niyalma. (SBKM91-25)

そうでは あるが 雨 与 湿らす-受動/使役-過去 人

「しかしながら雨に濡らされた人がいる。」

この場合、「de」の使い方は「に」と並行的であるようだ。ただし、満州語には日本語の「雨に降られる。」「子供に泣かれた。」のような自動詞の受け身表現がないため、「de」は他動詞の受け身だけに用いられている。

⑩被使役者

例文(39)~(41)は与格助詞が「被使役者」を表す例文である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例(39)、(40)は日本語の「に」が「被使役者」である「太郎」、「学生」をマークする用法である。例(39)の述語動詞は他動詞である。例(40)の述語動詞は自動詞である。

例文(41)~(43)は満州語の「**de**」が「被使役者」である「私」、「人」、「主」をマークしている。例(41)、(42)の述語動詞は他動詞である。例(43)の述語動詞は自動詞である。

日本語:

(39) 先生は太郎**に**本を読ませる。

(40) 学生たちを教室**に**入らせた。

満州語:

(41) Solo Solo **de** udu meyen manju gisun banjibu-fi min-**de** hvla-bu-re-o.(YBT001:17)

暇 暇 与 幾 条 満州 語 編纂-連用 私-与 読む-受動/使役-将来-疑問

「暇な時に幾条かの満州語を編纂して私に読ませて頂けましょうか。」

(42) niyalma **de** donji-bu-me hvla-mbi. (SBKM35-11)

人 与 聞く-使役-連用 読む。

「人に聞かせて読む。」

(43) ini da ejen **de** bedere-bu-he. (MSZR6-112:5)

その もとの 主 対 帰る-受動/使役-過去

「そのもとの主に還らせた。」

これらの例文では、この意味役割を表す場合、「**de**」と「に」が同じように使われている。ただし、満州語においては、「被使役者」は対格標識「**be**」で表すことが多い。満州語の与格「**de**」が「被使役者」を表せることに言及した先行研究は管見の限り見出されないが、満州語の資料庫などでいくつかの例文が見つかった。また、母語話者の確認も得た。

以下に対格標識「**be**」で「被使役者」をマークする例文をいくつか挙げる。例(44)、(45)は満州語の対格標識「**be**」がそれぞれ「被使役者」である「行った者」「私」をマークする例文である。例(45)には対格標識「**be**」が二つあるが、「被使役者」を太字で表した。例(44)の述語動詞は自動詞である。例(45)の述語動詞は他動詞である。

(44) genhengge **be** gemu amasi bedere-bu-∅. (上原 1960)

行った者 対 皆 後に 帰る-受動/使役-命令

「行った者をみな後に帰らせよ。」

(45) tere mim-**be** emu bithe **be** udabumbi. (金・鳥 1998)

彼 私-対 一つ 本 対 買わせる

「彼は私に一つの本を買わせる。」

「被使役者」をマークする点で、満州語の与格標識「**de**」と対格標識「**be**」は同様である。

⑪原因

例文(46)~(54)は与格助詞が「原因」を表す例文である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例文(46)~(49)においては、日本語の「に」は、それぞれ「震える」、「気を失った」、「倒れる」、「体中が濡れてしまった」という結果を起こさせる「原因」である「寒さ」、「熱さ」、「弾丸」、「雨」をマークしている。

例文(50)~(54)において、満州語の「**de**」はそれぞれ「来ることができない」、「来た」、「死ななかつた」、「命が無くなった」、「倒れた」という結果を起こさせる「原因」である「寒さ」、「病気」、「公事」、「けが」、「雨」をマークしている。この意味役割を表す場合、「**de**」と「に」は並行的である。

日本語:

(46) 寒さに震える。

(47) あまりの熱さに気を失った。

(48) 太郎が弾丸に倒れる。

(49) 突然の雨に体中が濡れてしまった。

満州語:

(50) Shvrun **de** ji-me mute-rakv. (金・鳥 1982)

寒さ 与 来る-連体 できる-否定

「寒さのために来ることができない。」

(51) siden baita **de** ji-he. (MHDCD 675c)

公 事 与 来る-過去

「公事で来た。」

(52) ere nimeku **de** bucu-he-kv bicibe. (SBKM95-22)

この 病気 与 死ぬ-過去-否定 けれども

「この病気で死ななかつたけれども。」

(53) feye **de** ergen yada-ha. (MHDCD 675c)

けが 与 命 死ぬ-過去

「けがで命が無くなった。」

(54) adak-i boo-i fiyasha aga **de** Seke-bu-fi tuhe-ke sembi.

隣の家の切妻壁雨と湿り透る-受動/使役-連体 倒れる-過去 と言う。

「隣の家の切妻壁が雨に濡らされ倒れたと言う。」(SBKM86-25)

⑫存在位置

例文(55)~(58)は与格助詞が付いた名詞句が「存在位置」を表す用法である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例文(46)、(47)においては、日本語の「に」は、それぞれ「存在位置」である「駅の前」、「教室」をマークしている。

例文(55)~(58)において、満州語の「**de**」はそれぞれ「存在位置」である「小街の中西辺の麓の曲った所」、「君達の向かい」をマークしている。この用法も、「**de**」と「に」は並行的である。

この場合、与格助詞に続く述語には「ある」、「いる」、「ない」のような存在動詞または「住む」、「存在する」、「泊まる」などの存在の意味を持つ動詞が来ることが多い。²

日本語:

(55) 駅の前**に**大学がある。

(56) 太郎は教室**に**いる。

満州語:

(57) siyoo giyei i dolo wargi erg-i gencehen i murihan **de** te-hebi se-mbi.

小街属中西麓-属峰属路の湾曲した処と住む-完了 という

「今小街の中西辺の麓の曲った所に住んでいるという。」(YBT084:05)

(58) suwe-ni bakcin **de** bisire tere emu falga boo antaka. (MSZR57-1)

君達-属向かいとあるあの一軒家どうか

「君達の向かいにあるあの一軒家かどうか。」

日本語と満州語の与格は共に「場所」の用法を持っているが、日本語の「に」は人・物事の存在する場所だけを表すが、満州語の「**de**」は存在の場所と行動の行われる場所の両方を表す。この点について、3.2節で詳しく説明する。

⑬所有者

例文(59)~(62)は与格助詞が「所有者」を表す用法である。両言語の与格助詞を太字で表示す

²満州語には日本語のように有生物・無生物による「ある」、「いる」の区別がない。

る。例文(59)、(60)においては、日本語の「に」は、それぞれ「三人の子供」の「所有者」である「太郎」、「お金、暇」の「所有者」である「私たち」をマークしている。例文(61)、(62)においては、満州語の「**de**」はそれぞれ「衣服」の所有者である「私」、「眼」の所有者である「天」をマークしている。

この場合も、与格助詞に続く述語に「ある」、「いる」、「ない」のような存在動詞が来ることが多いが、構文全体としては位置関係ではなく、所有関係を表している。⑫と⑬を同じ用法としてとらえる先行研究もある(朴 1997 など)が、筆者は意味論的に見れば、存在位置と所有者とは明確な区別を持つと考える。例えば、例文(55)が示すように、「駅の前」は「大学」の存在する場所であるが、「大学」の持ち主ではない。同じく、例文(61)においては、「私」は「衣服」を所有しているが、「衣服」の存在する位置とは限らない。したがって、使い方が似ていても、本稿では二つの独立した意味役割として捉える、次節でまた詳しく説明する。

日本語:

(59) 太郎には子どもが三人いる。

(60) 我々には金も暇もない。

満州語:

(61) **min-de etuku bi.** (SBKM50-21)

私-与 衣服 ある

「私には衣服がある。」

(62) **abka de yasa bi kai.** (SBKM90-33)

天 与 眼 ある ぞ

「天には眼があるぞ。」

この用法も、「**de**」と「に」はほぼ並行的である。

⑭比較の基準

例文(63)~(68)は与格助詞が「比較の基準」を表す例文である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例(63)~(65)は日本語の「に」が「比較の基準」としての「父親」、「次郎」、「大人」をマークする用法である。例文(66)~(68)は満州語の「**de**」が「比較の基準」としての「2人」、「兄弟」、「正妻」をマークする用法である。この場合、「**de**」と「に」が同じように使われている。

日本語:

(63) あの子は父親に全然似ていない。

(64) 太郎は次郎に比べて背が高い。

(65) 体格は大人に勝る。

満州語:

(66) juwe **de** tehere-mbi kai. (SBKM61-41)

2人 与 匹敵する ぞ

「2人(の戦力)に匹敵するぞ。」

(67) ahvn deo **de** isire-ngge akv. (SBKM30-34)

兄 弟 与 及ぶもの ない

「兄弟に及ぶものない。」

(68) jingkini sargan be elemangga aha nehu **de** isi-rakv adunggiya-mbi.

正 妻 対 かえって 下男下女 与 及ぶ-否定 痛めつける

「正妻をかえって下男下女に及ばず痛めつける。」 (SBKM69-28)

⑮参照点

例文(69)~(75)与格助詞が「参照点」を表す例文である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例文(69)~(72)は日本語の「に」が「参照点」としての「お酒」、「人生の経験」、「200年」、「2日」をマークする用法である。例文(73)~(75)は満州語の「**de**」が「参照点」としての「口」、「一服」、「十幾錢」をマークする用法である。

日本語:

(69) 私はお酒に強い。

(70) 彼は人生の経験に乏しい。

(71) この断層はおよそ 200 年に 1 センチのずれを生じる。(記述文法研究会 2009)

(72) 多くの警察官が、2 日に一回の宿直、という過酷な勤務についている。

(記述文法研究会 2009)

満州語:

(73) sain okto angga **de** gosihon. (SBKM100-22)

良い 薬 口 与 苦い

「良い薬は口に苦い。」

(74) emu fu-**de** gvsin wandz-be furgisu muke-de omi- ∅. (LQD7:056)

一 服-与 三十 丸-対 しょうが 水-与 飲む-命令

「一服に三十丸をしょうが水で飲め。」

(75) juwan udu jiha **de** emu moro hiyase baha-mbi. (YBT045:18)

十 幾 錢 与 一 升 [榘] 得 爾

「十幾錢に一升[榘]得られる。」

記述文法研究会(2009)は(71)、(72)の例は「割合」という独立の意味用法として捉えているが、本稿は「参照点」に分類した。この用法も、「に」と「**de**」はほぼ並行的である。ただし、以下のような基準分母となる一定数と分子となる部分量が同じ単位を取る表現は日本語の「に」だけに現れる。

例：

(76) 留学生の二人に一人は住居探しで困ったことがあるそうだ。

(77) 一週間に1日はお酒を飲まない日を作りましょう。(記述文法研究会 2009)

満州語の「**de**」にはこのような使い方がない。しかし、「**de**」で分数を表す場合は、「割合」の意味を含むことができ、上の「に」とよく似ていると思う。

(78) 分数 8 分の 7 は jakvn **de** nadan.

8 与 7

分母と分子の後ろには **ubu**(分)がつけられる。例えば、

(79) juwan **ubu de** juwe **ubu** 「十分の二」

十 分 与 二 分

(80) tumen **ubu de** emu **ubu** 「万分の一」(XMH765b)

万 分 与 一 分

(81) jui oho niyalma tumen **de** emgeri karula-me mute-mbi-o. (SBKM9-24)

子 なった 人 万 与 一 つ 報いる-連用 できる-疑問

「子になった人は万の一つも(親に)報いることができるか。」

(78)~(81)などの分数的な用法における「**de**」と、例(71)、(72)の「に」とは同じ意味役割を担っていると考えられる。

⑩時点

例文(82)~(85)は与格助詞が「時点」を表す例文である。両言語の与格助詞を太字で表示する。例文(82)は日本語の「に」が「時点」としての「三時」をマークする用法である。例文(83)~(85)は満州語の「**de**」が「時点」としての「正午」、「二十四日」、「自分が歩く時」をマークする用法である。この場合、「**de**」と「に」は同じように使われている。

日本語：

(82) 三時に会議がある。

満州語：

(83) inenggi dulin **de** isina-fi, (SBKM50-6)

日 半分 与 至る-連用

「正午に至って、」

(84) juwe biyai orin duin **de** isinji-ha. (MSZR5-60:6)

二 月-属 二十 四日 与 到着-過去

「二月の二十四日に到着した。」

(85) beye yabu-re **de** inu hao hio sembi. (SBKM9-14)

自身 歩く-連体 与 も 昂然 とする

「自分が歩く時も昂然とする。」

日本語と満州語の与格は共に「時間」を表せる。ただ、日本語の「に」が「時点」だけを表すのは違って、満州語の「**de**」は「時点」と「期間」の両方を表せる。「**de**」が「期間」を表す用法について、3.2 節で詳しく説明する。

⑰ 様態

日本語の「に」と満州語の「**de**」は副詞的な働きも持っている。例(86)~(92)は「に」と「**de**」が「様態」を表す用法である。

例(86)~(88)は日本語の「に」が「様態」を表す用法である。例(86)は「に」が形容動詞の連用形と見なされる例である。例(87)は「に」が副詞につく例である。青木(1977)は例(87)のような例に現れる「に」について、副詞としての資格を持つ語の後ろに付き、副詞的修飾機能を明確化する機能をもつ用法であるとしている。例(88)は「に」が体言の後ろにつく例である。この「に」について、文展開能力のない体言に展開能力を与え、副詞としての修飾機能を与えると青木(1977)が述べている。

日本語：

(86) 安全に作業する。

(87) びりびりに破る。

(88) 常に本を読む。

例(89)~(92)は満州語の「**de**」が「様態」を表す用法である。例(89)、例(90)は「**de**」が形容詞の後ろにつき、副詞的修飾機能を果たす例文である。例(91)、例(92)は「**de**」が名詞の後ろにつき、

副詞的修飾機能を果たす例文である。

満州語：

(89) emu belge seme ja de baha-ngge seme-o. (SBKM 82-15)

一つ 米粒 でも 容易(な) 与 得る-連体 と言う-疑問

「一つの米粒でも容易に得られると言うか。」

(90) jaka be geren de tucibufi, (MSZR8-149:6)

もの 対 諸々(に) 与 出す-連用

「ものをもろもろに出し」

(文脈から見れば、この「もろもろに出し」は「軍隊が得たものをいろいろ出して、独り占めではなく、みんなに分ける。」の意味である。)

(91) jabSan de sini ji-he-ngge erde. (YBT044:10)

幸運 与 貴方の 来る-過去-連体 早い

「幸いに貴方の来たのは早い」

(92) ere ildun de mini boo-de dari-fi majige te-ki. (SBKM5-3)

この ついで 与 私-属 家-与 立寄る-連用 少し 座る-希望

「このついでに私の家に立ち寄り少し座れ」

この場合は、「に」と「de」はほぼ同じであるが、与格助詞がついた品詞の形態には若干の違いがある。

満州語では名詞あるいは形容詞に与格の要素を付けて様態副詞のようなものを派生する。満州語の形容詞は活用形がなくて、形容詞そのままの形で名詞として機能することもある。ここで、体言＋与格要素は様態副詞的なものを派生すると言えるだろう。日本語にも、例(88)のように体言に与格の要素をつけて副詞的な働きを持たせる用法がある。この点で、両者の使い方が並行的だと考える。

そして、中村・佐々木・野瀬(2015)によると、類型論の角度から見れば、形容詞は名詞的形容詞と動詞的形容詞に分類される。つまり、名詞と共通する部分が多い名詞的形容詞、動詞と共通する部分が多い動詞的形容詞に分けられる。日本語の形容詞は動詞的形容詞であり、形容動詞は名詞的形容詞である。従って、例(86)のように形容動詞の連用形で副詞的機能を果たす例では名詞的形容詞＋与格要素が副詞的表現を派生すると言える。この分類では、満州語の形容詞は名詞的形容詞だと考える。すなわち、満州語でも名詞的形容詞に与格の要素を付けて様態副詞

のようなものを派生すると言える。この点で、両者の使い方に類似性が見られる。

また、満州語の「de」には、日本語の例(87)のように、「すでに副詞としての資格を持つ語の後ろに付き、副詞的修飾機能を明確にする」用法がない。

3.2 異なる用法

日本語の「に」と満州語の「de」には用法上の相違もある。本節では、日本語の与格にはあるが満州語の与格にはない用法とその逆の用法を示すことにする。

3.2.1 日本語の「に」にはあって、満州語の「de」にはない用法

日本語の「に」だけにある用法は、「結果述語」、「授与者」、「経験者」、「添加」、「役割」、「尊敬の主体」である。ここで一つずつ例を挙げて説明する。

①結果述語

例文(93)、(94)は日本語の「に」が「結果述語」を表す例文である。「に」がそれぞれ「結果述語」である「赤」、「医者」をマークしている。

(93) 信号が赤に変わる。

(94) 医者になる。

満州語の「de」は、この用法を持っていない。満州語は動詞「ombi(日本語の「なる」に訳せる)」と名詞・形容詞の組み合わせだけで「結果述語」を表すことができ、格助詞は附属しない。

例文(95)~(98)が示すように、「役人になった」、「子になった」、「よくなった」などの「結果述語」は、動詞「ombi(日本語の「なる」に訳す)」と「hafan(役人)」「jui(子)」「yebe(よい)」などの名詞・形容詞と組み合わせて表す。格助詞を使わない。

(95) te donji-ci mujakv hvwaSa-fi hafan oho sere. (SBKM7-5)

今 聞く-条件 極めて 成就する-連用 役人 なる-過去 という

「今聞けば大変成長して役人になったという。」

(96) dobori oho manggi. (MSZR55-3)

夜 なる-過去 後

「夜になった後」

(97) jui oho niyalma tumen de emgeri karula-me mutembi-o. (SBKM9-24)

子 なる-過去 人 万 与 一つ 報いる-連用 できる-疑問

「子になった人万に一つも報いることできないか。」

(98) emu inenggi emu inenggi ci yebe oho. (SBKM95-14)

一日 一日 奪 良く なる-過去

「一日一日より良くなった。」

②授与者(起点)

例(99)は「に」が授受動作の起点である「授与者」を表す用法である。この「に」は、「授与者」である「友達」をマークしている。

(99) 私は友達に本をもらう。

満州語の「de」はこの用法を持っていない。満州語においては、普通、「授与者」を含む動作の起点を表すのは奪格標識「ci」である(この場合、「ci」は日本語の「から」、「より」と同じ意味である)。例(100)が示すように、満州語奪格標識「ci」が「便箋を与える」という動作の起点である「李さんという学生」をマークしている。

(100) jang hala-i tacikv-i jui jasigan be araki seme talu jasigan i gincihyan

張 姓-属 学校-属 子 手紙 対 書く-希望 と 偶々 手紙 属 精麗な

hooSan be ekiyefi, lii hala-i tacikv-i jui ci dende-me bu-fi.

(金・鳥 1981)

紙 対 欠ける-連用、李 姓-属 学校-属 子 奪 分け与える-連用 与える-連用

「張さんという学生は手紙を書こうと、ちょうど手紙の便箋が足りなくて、李さんという学生からもらった。」(訳は筆者)

③経験者

日本語の「に」は「経験者」の用法も持っている。例文(101)、(102)の「に」はそれぞれ「経験者」である「あなた」、「私」をマークしている。

(101) あなたにはわかりません。

(102) 私には中国語ができる。

満州語の「de」はこの意味を持っていない。満州語において、「経験者」の意味は主格(-o)で表す。以下に例を示す。例文(103)~(105)の「経験者」である「私」、「私」、「君」は主格(-o)でマークされている。

(103) bi tuwa sinda-me bahana-rakv. (LKD2:019)

私 火 つける-連用 できる-否定

「私は火をつけることができない。」

(104) **bi yali cola-me bahana-rakv.** (LKD2:033)

私 肉 炒める-連用 できる-否定

「私は肉を炒めることができない。」

(105) **si nikan bithe bahana-ra niyalma kai.** (SBKM3-1)

君 漢 書物 できる-連体 人 だぞ

「君は漢書物ができる人だぞ。」

④添加

例(106)は「に」が「添加」の意味を表す例文である。朝ごはんはトマトにコーヒーを添えたものであるという意味を表す。この場合、「に」がマークする名詞は人も物も可能である。日本語記述文法研究会(2009)は、この「に」は疑問詞に後接することができないと述べている。また、並列された名詞の最後の要素に「に」をつけることはできないという。

(106) 朝ごはんはトマトにコーヒーです。

この用法は格としての用法か、並立助詞としての用法か、研究者によって捉え方が分かれている。安(2017)は「月にむら雲」、「花に風」の「に」は格助詞の「に」と捉え、「野菜に魚に肉」の「に」は、並立助詞として捉える。その理由を以下のように述べている。

格助詞と判断される「に」は次の条件を満たす。**a.**省略された述語を補充すれば、「に」は格助詞の働きをする。例えば、「月にむら雲がかかっている」。**b.**「は」の付与を許す。例えば、「月に<は>むら雲」、「松に<は>鶴」。**c.**「に」の前後の名詞は入れ替え不可能である。一方、並立助詞と判断される「に」は例(106)が示すように、次の二つの特徴があるという。**a.**「に」の前後の名詞は入れ替え可能である。**b.**全体を一つの名詞として機能させる。

本稿もこの分類に同意する。意味解釈の角度から見れば、いずれにしても、「に」は「付け加え、添加」の意味を持っていると考えられる。そして、「飲みに飲んだ」「泣きに泣いた」のような「VにV」の「に」も動作の付け加えによって同じ動作が続き、反復の意味を強調することと捉えられる。

満州語の「**de**」は「添加」の意味を表せない。また、満州語には共格もない。上原(1960)によると、満州語においては、並立した語句には何も使わないのが普通である。稀には接続詞 **jai** (日本語の「および」、「と」と翻訳せる)を使う。ここで、いくつかの例を挙げる。長い例文もあるが、重要な部分は太字で明示されている。

例文(107)は、「松の果」と、「しいたけ」と、「きくらげ」この三つのものを求めるという意味を表し、名詞の間には何も来ない。例文(108)も、名詞「石」と「木」そのまま、「石」+「木」という意味を表している。例文(109)も同じ用法だが、「添加」の対象である名詞はものではなく、「大貝勒」(人名)などの人である。例文(110)は接続詞「jai」で「博羅齊という大臣」に「十一人の者」を付け加えて、共に追放する対象であるという意味を表す。

これらの例が示すように、満州語には、名詞の並列または接続詞「jai」で「添加」の意味を表し、格助詞が用いられない。

(107) **hvri, megu, sanca baime**, (MSZR4-98:1)

松の果、しいたけ きくらげ 求める-連用

「松の実、しいたけ、きくらげを求め、」

(108) **wehe moo be goro ba-ci ga-ji-me joboho**, (上原 1960)

石 木 対 遠き 地-奪格 持つ-来る-連用 苦労する-過去

「石と木を遠い場所から持って来るのに苦労した。」

(109) **amba beile, manggvltai beile, hongtaiji beile, geren amba-sa-i baru hendume**,

大 貝勒、莽古爾泰 貝勒、 皇太極 貝勒、 諸 大人-複数-属向って 話す-連用

「大貝勒、莽古爾泰貝勒、皇太極貝勒、諸大人等に向って話して、」(上原 1960)

(110) **boroci gebungge amban, jai juwan emu niyalma be sinda-fi**,

博羅齊 という 大臣、 及び 十 一 人 対 追放する-連用

「博羅齊という大臣、及び十一人の者を追放して、」(上原 1960)

⑤役割

例(111)~(115)は「に」が「役割」の意味を表す用法である。この「に」は普通、「として」と言い換えることができる。例えば、例(111)は「お礼として手紙を書く」と言い換えられる。例(113)は「秘書として雇う」と言い換えられる。

(111) お礼に手紙を書く。

(112) 旅行の記念にお土産を買った。

馬(1997)は、この場合の「に」と「として」が交換できる条件は、述語動詞が以下のような動詞になる場合であると述べている。

「選ぶ(選択する)・掲げる・数える・採用する・推薦する(薦める)・揃える・立てる(対象に

人がくる場合)・使う・取る・残す・望む・迎える・まとめる・用いる・招く・もらう・雇う・利用する」³

また、このタイプの動詞は、動詞の示す行為によって影響を受けるものを、他の何かに認定するという意味を表しており、影響を受けるものを「を」格で示し、認定されるものを「に・として」の両方で示すことができるものであるという。

日本語記述文法研究会(2009)は「役割」を格助詞「に」の用法の一つとして捉え、(111)、(112)の例を挙げた。丸山(2010)は(111)、(112)のような例文は、二格ではなく副詞的成分であると指摘し、例文(113)~(115)の使い方こそ、二格を要求する「役割」の例であるという。

(113) 秘書に雇う。

(114) 候補者に選ぶ。

(115) 嫁にやる。

本稿もこの分類に同意する。満州語の「de」ではこの意味を表せない。満州語にはこの意味役割は以下の例(116)~(118)が示すように、名詞の零記号表現あるいは副体詞「**seme**(「として」、「という」などの意味を持つ)」で表す(上原 1960 参照)。

例(116)は名詞の零記号で「役割」の意味を表している。「子供を妻として与えた」に翻訳され、「妻」という「役割」をマークしている。例(117)、(118)は満州語の副体詞「**seme**(太字で表明されている)」でこの意味をマークする例文である。それぞれ「子供として養う」「うちの家奴の子供として食べる場所を与える」の意味である。「子供」、「うちの家奴の子供」という「役割」をマークしている。

(116) **jui be sargan bu-he.** (MSZR3-40:6)

子 対 妻 與える-過去

「子を妻とし與へき。」

(117) **jui seme uji-fi,** (MSZR2-77:4)

子 とし 養う-連体

「子とし養ひて、」

(118) **boo-i ujin jui seme baha-ra jete-re ba-de geli esi seci ojo-rakv.**

家-属 奴の子 として 得る-連用 食う-連用 所-与 又 如何 とも できる-否定

「家の家奴の子として得て食べる所にて又如何ともしがたい。」(YBT099:16)

³馬(1997)はこれらの動詞を「二格認定動詞」と呼ぶ。

3.2.2 満州語の「de」にはあって、日本語の「に」にはない用法

満州語の「de」だけが持つ用法は、「期間」、「経路」、「動作の行われる場所」、「道具的な用法」である。ここで具体的な例文によって、説明する。

①期間

例文(119)~(121)は「de」が「期間」を表す用法である。例(119)は「de」が「歩いて三日間で大古というところにつく」の「三日間」をマークしている。例(122)は「de」が「車を乗って大体三時間かかる」の「三時間」をマークしている。例(121)は、「de」が「商人は巳、午、未の三つの時間帯でよく警戒し歩く」の「巳、午、未」の間の時間帯をマークしている。

例(119)、(120)は中村・佐々木・野瀬(2015)が具格標識「で」が担うとした役割「持続」(有界的事象の開始から終了までの経過期間)の定義を適用することができる。ただ、例(121)では「de」がマークする時間は、巳(9時-11時)、午(11時-13時)、未(13時-15時)この三つの時間帯の間である。つまり9時から15時までの時間帯を指している。「de」がマークする「期間」の範囲には、「持続」だけではなく、「時間帯」の意味も含む。

(119) bodoci ilan inenggi de yabu-ci, teni dagu sere ba-de isina-fi.

思うに 三 日 与 歩く-条件、つい今し方 大古 という ところ-与 つく-連用
「三日間歩くと、大古というところにつくと思う。」(訳は筆者)(金・鳥 1998)

(120) sukduŋ sejen de te-fi, muruseci ilan tonkin fulu jungken de yabu-fi,

気 車 与 乗-連用、大体 3 時間 余り 鐘 与 走る-連用。
「汽車に乗って、大体3時間余りで走る」(訳は筆者)(金・鳥 1998)

(121) dule-me yabu-re hvda-i niyalma meihe morin honin ere ilan

通過-連用 行く-連体 商-属 人 巳 午 未 この 三つ
erin-de saikan seremxe-me yabu-∅. (季・劉・屈 1986)

時間-与 よくよく 守備する-連用 歩く-命令
「行ったり来たりする商人は巳午未この三つの時間帯によく警戒し歩く(訳は筆者)」

時間に関しては、日本語の与格は「時間点」だけを表す。満州語の与格は、「時間点」だけではなく、期間も表せる。この「期間」は、「持続」、「特定の時間帯」の意味を含んでいる。日本語の具格標識「で」と一部の機能が重なっているが、「で」より広い範囲の意味を持っている。

②経路

例(122)~(124)は「de」が「経路」を表す用法である。例(124)~(126)は「経路」である「道」、「空」、「街道」をマークしている。

(122) jugvn **de** yau-mbi. (東北師範 2010)

道 与 歩く

「道を歩く。」(訳は筆者)

(123) abaki **de** dele-mbi. (東北師範 2010)

空 与 飛ぶ

「空を飛ぶ。」(訳は筆者)

(124) jugvn giyai **de** yabu-re urse. (SBKM53-15)

街 道 与 歩く-連用 人達

「街道を行く人達。」

また、満州語においては対格標識「be」で「経路」を表すことが多い。沿格標識「deri」もこの意味を持っている。

次の例(125)、(126)は対格標識「be」が「経路」である「河」、「路」をマークする例である。上原(1960)は満州語対格標識「be」は「移動的行動の経路的関係」を示す時、日本語の対格助詞「を」とまったく同様の用法を示すという。

(125) bira **be** doo-fi, (MSZR2-57:7)

河 対 渡る-連用

「河を渡り、」

(126) jugvn **be** gene-me, (MSZR5-58:6)

路 対 行く-連用

「路を行き、」

例(127)、(128)は沿格標識「deri」が「経路」である「裏門」、「長白山の麓路」をマークする例である。

(127) amargi duka-i **deri** PanGinLiyan-i boo-de ji-he. (山本 1955)

裏 門-具 通って 潘金蓮-属 家-与 来る-過去

「裏門を通って潘金蓮の家に来た。」

日本語の与格標識「に」は、この意味を持っていない。日本語においては、「経路」を表すのは対

格標識「を」である。⁴例(129)、(130)では、日本語の「を」が「経路」である「川」、「廊下」をマークしている。

(128) 川を泳いで渡った。(日本語記述文法研究会 2009)

(129) 廊下を走ってはいけません。(日本語記述文法研究会)

また、奪格「から」もこの用法を持っている。例えば、

(130) 燃えないごみはこちらの口からゴミ箱に入れてください。(日本語記述文法研究会 2009)

③動作の行われる場所

満州語の「de」は「動作の行われる場所」を表すこともできる。以下の例(131)~(133)で説明する。例(131)では、「de」が「飛び跳ねる」という動作の行われる場所「地面」をマークしている。例(132)は、「de」が「買う」という動作の行われる場所「店」をマークする例である。例(133)は、「de」が「弾く歌う」という動作の行われる場所「船」をマークする例である。

(131) na de fekuce-me bi. (SBKM67-12)

地面 与 飛び跳ねる-連用 いる

「地面で飛び跳ねている。」

(132) ere seke kurume puseli de uda-ha-ngge-o. (YBT024:01)

この 貂皮 褂 店 与 買う-過去-連体-疑問

「この貂皮の褂は店で買ったものか。」

(133) jahvdai de fithe-re ucule-re-ngge. (SBKM73-16)

船 与 弾く-連用 歌う-連用-もの

「船で弾き歌う者。」

日本語の「に」は、3.1 であげた「存在の場所」を表し、静態的な場所を表せるが、(131)~(133)のような動作・出来事のいき場所、即ち動態的な場所を表せない。日本語においては、「動作の行われる場所」は具格標識「で」で表す。場所的な用法には、満州語の「de」は日本語の「に」の用法と「で」の用法を兼ねており、用法が広い。

④道具

満州語の「de」は「道具」の用法も持っている。まずは、「道具」の定義を示す。

⁴ 「経路」を表す時、満州語の「de」は日本語の対格標識「を」と同じように使われているが、日本語の「を」はより広い領域で使われ、以下のような「時間的な経過域」も表せる。例：「鈴木さんは夫に愛され、短いながらも幸せの人生を送った。」「お正月を実家で過ごした。」(日本語記述文法研究会 2009)

Palancar(2002:32)は以下のように述べた。

The role played by the object the Agent manipulates to achieve a change of state on the patient.

Narrog(2008)はこの定義を典型的な「道具」として捉え、「He cut the tree with a knife.」を核心的な道具の例としてあげた。また、「交通手段」は言語によって使い方が違うので、核心的な「道具」ではないという。

本稿は Narrog(2008)の観点に賛成し、Palancar(2002)の定義を典型的な「道具」として、「交通手段」、「方法・手段」、「根拠」、「代価」などを非典型的・周圈的な道具の用法として「道具」を分類する。

ここで例を挙げて説明する。例(134)~(137)では、「de」がそれぞれ「道具」である「足」、「もの」、「水」、「鱗の血」、「五百両銀」をマークしている。

(134) *bethe de emu jaka be fehu-fi.* (哈 1998)

足 与 一つ もの 対 踏む-連用

「足で一つものを踏む。」

(135) *sirdan be jabjan de hata-fi,* (MSZR1-189:4)

矢 対 鱗 与 刃を浸す-連用

「矢を鱗の血で浸し、」

(136) *sunja tanggv lang menggu de emu hehe uda-fi.* (YBT015:14)

五 百 両 銀 与 一つ 女 買う-連用

「五百両銀で一人の女買う。」

(137) *bengsen de jiha gai-mbi.* (東北師範 2010)

腕前 与 金 取る

「腕前で金取る。」

日本語の「に」はこの用法を持っていない。日本語において、「道具」は具格の標識「で」で表す。

例(139)~(141)では、「で」が「道具」である「手」、「カメラ」、「ナイフ」、「バス」をマークしている。

(138) 「手で空き缶をつぶす。」

(139) 「カメラで写真を撮る。」

(140) 「ナイフでりんごを切る。」

(141) 「バスで行く。」

だが、日本語の「で」には、例(141)が示すように、「交通手段」を表すこともできる。満州語の

「de」はこの用法を持っていない。「道具」を表す時、日本語の「で」は満州語の「de」より、もっと広い用法を持っている。

また、満州語においては、「道具」の意味は一般的には具格の「i」で表す。ここで、「i」が「道具」をマークする例をいくつか挙げる。例(142)~(146)では、「i」が「道具」である「斧」、「手」、「銭銀」、「言葉」をマークしている。

(142) suhe-i saci-me, (津曲 2001)

斧-具 切る-連用

「斧で切り、」

(143) gala i jafa-mbi. (東北師範 2010)

手 具 掴む

「手で掴む。」

(144) jiha menggun i udafi eture oci, (SBKM64-21)

銭 銀 具 買う-連用 着る-連用 ならば

「銭銀で買い着るならば、」

(145) asihata be nesuken gisun i sain ba-de yarhvda-mbi. (SBKM28-12)

若者たち 対 穏やかな 言葉 具 良い 所-与 導く

「若者たちを穏やかな言葉で良い所に導く。」

こちらの例文から見れば、「de」と「i」の使い方がほぼ同じだと考える。入れ替え可能と書いている先行研究はないが、以下の例(147)、(148)のような同じ文脈で使う例が見つかった。

(146) uthai muke de oboho adali. (SBKM55-17)

まるで 水 与 洗う-過去 よう

「まるで水で洗ったよう」

(147) muke i obo-mbi. (東北師範 2010)

水 具 洗う

「水で洗う。」(訳は筆者)

道具を表す多くの例で、「de」と「i」は入れ替え可能である。だが、以下の例(148)~(150)が示すように、具格標識「i」は「交通手段」である「船」、「馬」、「徒歩」をマークしている。前に述べたよう、与格標識「de」はこの用法を持っていない。

(148) dogon be cuwan i doo-fi dobori, (MSZR8-35:2)

渡し 対 舟 具 渡る-連体 夜

「渡しを舟もて渡り夜。」

(149) juwe morin i ebSe-me takvra-ha. (MSZR8-43:6)

二 馬 具 急ぐ-連用 遣わす-過去

「二匹の馬もて急ぎ遣した。」

(150) ai hacin i hafirahvn suilashv sehe seme inu yafahan i gene-fi

どんな 種類 属 窮迫 貧困 と いても 亦 徒歩 具 行く-連用

「どんな種類の窮迫貧困といても亦徒歩で行き一盃酒を濯ぎます。」

emu gvntahan arki hisala-mbi. (YBT005:13)

一 盃 酒 灌ぐ

また、道具を表す時の、「de」と「i(ni)」との異同についてももう少し述べたいと思う。

i. 「de」と「i」の使う頻度

満州語の道具の用法は大体具格の「i」で表し、「de」で表すことは少まれと思われる(河 2002、金・鳥 1998 など)。

確かに「de」が道具を表す例は多くない。『清文啓蒙』においては、道具の意味を表す「de」は五つだけである。上原(1960)も、『満州実録』においては、「de」の道具格の例は二つしかないと述べている。「de」はやはり主に与格の意味で使われている。

ii. 「de」は道具を表す時、根拠の意味を含む例が多い。多くの場合、「…によって」、「…に頼る」、「…に照らした」「…のおかげで」に翻訳できる。

例えば、

(151) temgeetu de dosimbi. (東北師範 2010)

チケット 与 入る

「チケットで入る。」(訳は筆者)

(152) Sajin de gai-ha. (上原 1960)

法 与 取る-過去

「法によって取った。」

iii. 「de」と「i」の使い方の異同に言及する先行研究は Gorelova(2002)だけである。Gorelova(2002)は「de」と「i」の違いについて以下のように述べた。

- a. 「de」は過去の動作、「i」は現在の動作
 b. 「de」は他人の行動に言及、「i」は自分の行動
 だが、a b とも逆の例が見つかった。

(i) 「i」が過去の動作を表す時に使われる例

(153) ere gida i suja-ha. (SBKM35-15)

これ 槍 具 防ぐ-過去
 「これ槍で防いだ。」

(154) wa-∅ seme futa-i tata-me wa-ha, (MSZR 6-67:4)

殺す-命令 と 縄-具 締める-連用 殺す-命令-過去
 「殺せと縄もて締めて殺せり。」

(155) tenteke-ngge udu gecuhher-i junggin i hvsibuha

あの様なもの 幾ら 蟒緞-属 錦 具 包む-受動/使役-過去

seme ai ferguwecuke. (YBT 058:16)

とて 何の 驚くべき

「あの様なもの幾ら綾錦で包まれたとて何とて驚くべきであろう。」

(156) ambula golo-fi homin i meihe be juwe meyen obu-me lashala-me saci-fi,

大いに 驚く-連用 鋤頭 具 蛇 対 二 条 為す-連用 断つ-連用 斬る-連用、

amcana-fi jamara-me hendume bi suwen aika kimun bi-o.

追い行く-連用 喧嘩を吹きかける-連用 言うに 私 貴方がた 或は 讐 ある-疑問

「大いに驚いて鋤頭で蛇を二条として断ち斬り、追いかけて喧嘩を吹きかけ言うに私は貴方がたに或は讐があるか。」 (YBT054:05)

(ii) 「de」が過去ではない時を表す時に使われる例

(157) min-i age yasa de geli im-be dabu-mbi-o. (SBKM54-20)

私-属 兄 眼 与 また 彼-対 認める-疑問

「私の兄は眼でまた彼を認めるか。」

(158) ai jaka-de orho-be gama-mbi. (LQD2:138)

どんな 物-与 草-対 持って行く

「どんな物で草を持って行くか。」

(iii) 「de」が自分の行為を言う時使われる例

(159) min-i yasa **de** sabu-fi, jui emu…(MSZR6-038)

吾-属 目 与 見る-連用、子の 一つ…

「吾が目を見て、子の 一つ…」

(iv) 「i」が他人の行動を表す時に使われる例

(160) han i gala-**i** ana-me omi-bu-ha, (MSZR7-65:3)

汗 属 手-具 推す-連用 飲む-受動/使役-過去

「汗の手もて推して飲ましめぬ。」

(161) mem-be antaha **i** doro-i tuwambi-o. (YBT014:17)

我々-対 お客 具 礼-具 扱う-疑問

「我々をお客の礼で扱いますか。」

以上の例文から、Gorelova(2002)の「de」と「i」に対する分析は正しくないと考える。

4. 意味俯瞰図による分析

本章は日本語の「に」と満州語の「de」を分析して得た意味俯瞰図について解説する。

4.1 日本語の「に」と満州語の「de」の意味俯瞰図

3章では具体的な例文で日本語の「に」と満州語の「de」に共通する用法と異なる用法があることを明らかにした。

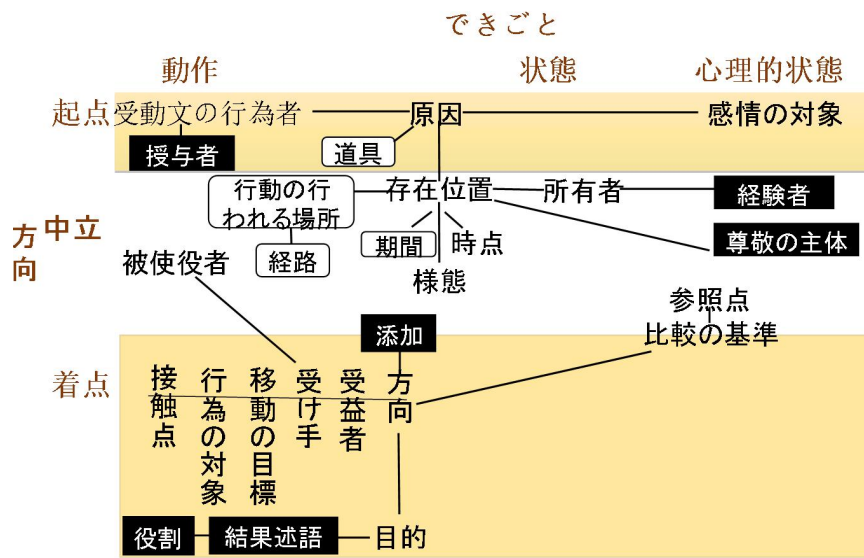
両言語の与格助詞の意味・用法の異同は以下のようにまとめられる。

共通する用法: 存在位置、時点、接触点、目的、方向、動作の目標、原因、感情の対象、行為の対象、参照点、受け手、受益者、非使役者、比較の基準、受動文の動作主、所有者、様態

日本語の「に」だけ: 結果述語、授与者、経験者、添加、役割、尊敬の主体

満州語の「de」だけ: 期間、経路、動作の行われる場所、道具

図4の「に」の意味地図(Sasaki and Caluianu 2009より)を修正した上で「de」の意味用法を付け加え、上記の異同を以下の意味俯瞰図(図8)で表した。



字：共通する用法

字：満州語の「de」だけ

字：日本語の「に」だけ

図 8. 日本語の「に」と満州語の「de」の意味俯瞰図

4.2 意味俯瞰図の構成

「に」と「de」の意味俯瞰図を作る過程を説明する。

4.2.1 いくつかの意味役割の添加

日本語の「に」と満州語の「de」の意味・用法を全般的に比較・研究するために、より詳しい分類を試み、図 4 の「に」の意味地図を修正し、「原因」、「行為の対象」、「受益者」、「時点」、「様態」、「尊敬の主語」の六つの意味役割を加えた。以下でこれらの意味役割を加えた理由とそれぞれ意味地図における位置づけの理由を説明する。

〈1〉「原因」

「原因」を「受動文の動作主」に分類する考え方が多い(杉村 2005)。確かに「台風の家を飛ばされる」のように、受動文の動作主と解釈できる例が多いが、以下のような例もある。

例文：

(145) あまりの暑さに気を失った。

(146) 寒さに震える。

(147) 雨に濡れる木々の緑。

(148) 銃に死す。

(149) 人生に疲れて、自殺した。

(150) 癌に倒れた。

例(145)～(150)では、「に」がそれぞれ「気を失った」、「震える」、「濡れる木々の緑」、「死す」、「疲れて自殺した」、「倒れた」などの結果を引き起こす「原因」である「あまりの暑さ」、「寒さ」、「雨」、「銃」、「人生」、「癌」をマークしている。こちらの例は、述語で表される事態を生じさせる「原因」自体の意味が強く、「受動文の動作主」に分類することができないと思われる。このような点から、「原因」を独立の役割の一つとして意味俯瞰図に加えた。

「原因」は「存在位置」との関連性が強いと考え、「存在位置」と繋いだ。これは典型的な「原因」の例を言い換えれば、はっきり見て取れる。例えば、「震える原因は寒さにある」「死ぬ原因は銃にある」「気を失った原因は暑さにある」。こちらの文の構成は「AはBにある」という形である。「何かはどこかにある」という存在の意味を表す構文と同じ形であり、「寒さ」などの「原因」は、普通「存在場所」であるBのところにある。この点で、「原因」と「存在位置」は共通するところがあり、関連性が高いと判断した。

そして、この意味役割の方向性は次のように示している。この意味役割の方向性は「暑さ→気を失った」「癌→倒れた」のように示すことができる。「原因」は物事の引き起こす起点とも言えるので、「存在位置」の上、起点の領域に置いた。森山(2008)は「原因」を「移動先」の抽象化したものと捉えているが、筆者はそれを支持できない。「原因」は事象が起きる原点であり、起点の領域に属すると捉え、「存在位置」の上のところに置いた。

また、「原因」と「感情の対象」と繋いだ。例(30)「騒音に困る」で見ると、「に」がマークしている「騒音」は「困る」という感情を引き起こす対象でありながら、その原因ともいえる。この二つの意味役割の関連性を認め、繋いだ。

〈2〉時点

3章で述べたように、満州語の「de」と日本語の「に」はともに時を表せるが、日本語の「に」は時点だけを表し、満州語の「de」は時点と期間の両方表す。この異同を明確に表すために、時を「時点」と「期間」に分けた。満州語の「de」と区別するため、「に」の意味俯瞰図に「時点」という意味役割を加えた。

日本語記述文法研究会(2009)は、時を事態の成立する時間的な位置づけと定義している。「期間」でも「時間点」でも時間的な位置の一種だと考え、「存在位置」と繋いだ。先行研究において

も両者の関連性を認め、時点が「位置」に分類されることが多い(岡 2007、杉村 2005、森山 2008)。

〈3〉行為の対象

「着点」の領域に「行為の対象」を加えた。図 4 の「に」の意味俯瞰図において、着点の領域には既に「接触点(Location of contact)」、「移動の目標(Goal of movement)」、「受け手(Recipient of GIVE)」、「方向(Direction)」などの意味役割がある。「行為の対象」はこれらの意味役割に重なる部分もある。例えば、「原子力発電所の建設に反対する(日本語記述文法研究会 2009)」のような用法における「に」には、抽象化して、反対するという動作の目標とも解釈できるし、「反対」という動作の終点とも言える。だが、この「に」の一番典型的な意味役割は、やはり「反対する」という「行為」の「対象」である「原子力発電所の建設」をマークすることだと思われる。そこで、着点領域の意味役割をさらに分類し、「行為の対象」を加えた。

なお、3 章で示したように、両言語の与格は「感情の対象」と「行為の対象」を両方とも表すことができる。対象を二つに分ける理由は、両者には方向性の違いがあるためである。例(30)「騒音に困る」が示すように、「に」がマークしている「感情の対象」である「困る」の起点あるいは原因は「騒音」である。例(30)には、「騒音→困る」という方向性がある。したがって、「感情の対象」は起点の領域に属する。同時に例(26)「大学に合格する」には、「大学←合格」という方向性がある。「に」がマークしている「行為の対象」である「大学」は合格するという行為の着点である。つまり「行為の対象」は着点の領域に属する。

〈4〉「受益者」

「受益者」は「受け手(Recipient of GIVE)」と重なる部分が多いが、重なっていないところもある。例えば、「子供に本をやる。」の「に」がマークしている「子供」は「受益者」でありながら、「受け手」でもある。「子供に読んでやる」の「に」がマークしている「子供」は「受益者」であり、典型的な「受け手」ではない。両言語の与格が持つ用法をより詳しく示すため、意味役割をできるだけ細分化した。また、「受益者」である「子供」は「読んでやる」という動作の着点だと見える。だから、「受け手」などの意味役割と同じく着点の領域に属すると考え、意味地図に「受益者」を加えた。

〈5〉「様態」

「様態」は普通、副詞的修飾語や連用成分と見られ、格としての働きはあまりないが、3 章で述べ

たように、この意味役割を表す副詞的なものは与格と同源の要素で構成されている。本稿は両言語の与格の対照研究であり、「に」と「de」の意味用法を全面的に分析し、意味俯瞰図に表したいので、「様態」を両言語の与格標識の周辺的な用法として「存在位置」の隣に置いた。

〈6〉「役割」

「位置」、「対象」などの意味役割と違って、「役割」はあまり二格の研究者に重視されていない。二格を意味論的に統一しようとしている先行研究でもこの意味・用法を扱っていない。3章で述べたように、「役割」は格助詞としての用法と副詞的な用法を、両方持っていて、「に」の重要な意味役割の一つだと考える。また、満州語の「de」がこの用法を持っていないため、両言語の与格助詞の差異を示す大切な用法でもあるので、「に」の意味地図に加えた。

「お礼に手紙を書く」のような副詞的用法は「お礼」は手紙を書くことである。お礼＝手紙を書く、「結果述語」と似ている。「秘書に雇う」などの格助詞的な用法は「結果述語」という解釈は不可能ではないが、「に」がマークしている「秘書」は、動詞「雇う」の内容・対象であり、その動作の着点・結果でもある。秘書になるということは、「雇う」の結果ともいえるだろう。この意味役割は着点性を持ちながら、「結果述語」と一定の関連性を持つので、「結果述語」と繋ぎ、着点の領域に置いた。

〈7〉「添加」

「添加」も「に」の中心的な意味役割ではないので、二格の意味を分析する文献であまり言及されていない。だが、3章で述べたように、この意味役割は、格的な用法も並立助詞的な用法もあり、また「NにN」、「VにV」の形でも使われている。満州語の「de」はこの意味を表せないので、両言語の与格標識の機能を区別する重要な意味役割だと考え、意味地図に加えた。

また、この意味役割の位置づけについて、少し論述したい。3章で述べたように、安(2016)によると、格助詞としての例は「月にむら雲」、「青菜に塩」が挙げられる。これらの例文には、「に」のわかるべき述語が省略されていて、実は「月にむら雲がかかっている」、「青菜に塩をかける」と解釈できるという。この角度から、「添加」の意味地図における位置づけを分析する。「月に向けてむら雲がかかっている」にむける方向性は「月←むら雲」である。同じく、「青菜に塩をかける」を解釈すれば、その方向性は「青菜←塩」である。この角度から見れば、「に」がマークしている「月」、「青菜」の方向性がはっきり表せる。動きの向けられる方をマークしているので、ここの「に」は着点の領域に属すると考える。

そして、並立助詞としての「添加」の例を見てみよう。「朝ごはんはトマトにコーヒーです。」「お弁

当にビール、アイスクリームいかがですか」以下の図 8 に示すよう、ここには、「に」がマークしている「トマト」に「コーヒー」を付け加える。「弁当」に「ビール、アイスクリーム」を付け加える。



図 9.「添加」の方向性

意味解釈の角度から、「に」は「添加」の向けられる方であり、矢印の着点に立っているが、典型的な着点の用法ではない(次節で分析する「比較の基準」と似ている)。そこで、この意味役割を「方向」と繋いで、典型的な着点の用法の少し上のところ、着点の領域と中立の領域の中間に置いた。

〈8〉「尊敬の主体」

3.2 章で述べたよう、日本語の「に」には、人を指す名詞につけて、尊敬の意を表す用法がある。満州語には敬語も尊敬表現もないため、当然与格助詞にもこの使い方がない。韓国語も敬語体系を持っているが、朴(1997)によると、韓国語の与格助詞もこの用法を持っていない。まさにこの用法は日本語の与格助詞の特徴とも言えるので、意味地図に付け加えた。

意味地図上の位置づけとしては、この意味役割を「存在位置」と繋ぎ、そして心理的領域においた。水谷(1996)は「この用法は『小松殿』のやうに住居を以って人を婉曲的に指した用法と並行的に解する」と主張する。朴(1997)も文の主語になる尊敬の相手として立てることを避け、場所として表現することによって敬意を表していると述べている。人のいる場所や方向を以て象徴的に表すことから生じる用法という点で、場所と一番関連性が強いと考えられ、「尊敬の主体」を「存在位置」と繋ぎ、中立の領域においた。そして、尊敬の意味を表すのは人の感情・心理的な意識なので、心理的領域に置いた。

4.2.2 いくつかの意味役割の位置の調整

〈9〉「授与者(起点)」

「授与者(起点)」を左下に移動し、「受動文の行為者」の真下に置いた。また起点の領域に属しているが、より「動作」の領域に近づいて来る。つまり、この意味役割は「起点」より「行為者・動作主」の意味が強いと考えられる。以下で理由を説明する。

例文(99)「私は友達に本をもらおう」で見ると、日本語の与格助詞「に」がマークしている友達は元

の文:「友達が私に本をあげる」の動作主でもあるし、移動の起点でもある。一般的には、日本語の奪格助詞「から」と同じように捉えられる。

だが、柴谷(1978)によると、ここでは、「に」と「から」の交替は、「動作主」と「起点」の両方の役割を果たす場合にだけ可能である。「起点」としてしか働かない場合、「から」だけが用いられる。「に」は用いられない。以下に例を挙げる。例文(151)の場合、単なる「起点」として働く「故郷」をマークする時、「に」は使えない。例文(152)において、「印象」という抽象的なものを受けるときも、「に」を使わないという。

(151) 太郎が故郷から便りをもらった。(柴谷 1978)

(152) 彼女が彼から良い印象を受ける。(柴谷 1978)⁵

この点で、「授与者(起点)」を表す「に」は、「起点」より「動作主」の意味が強い、状態より動作の領域に近づけるべきであると判断した。

〈10〉「比較の基準」

「比較の基準」を少し上に移動させ、着点の領域と中立の領域の真ん中に置いた。また、少し右に移動させ、状態の領域と心理的領域の真ん中に置いた。

「比較の基準」は「接触点(Location of contact)」、「移動の目標(Goal of movement)」、「受け手(Recipient of GIVE)」、「方向(Direction)」などの典型的な着点性を持つ意味役割と並行して着点の領域に置くべきではないと考える。この意味役割の方向性に言及する先行研究は少ない。杉村(2002)は「比較の基準」を「目的」、「受益者」などの意味役割と一緒に「一方向性を持った動きの着点」のグループに分類した。また、図9に示すように、このグループに属した他のメンバーと同じ、何らかの行為の結果の及ぶ〈着点〉を表している」と述べた。だが、詳しく説明していない。

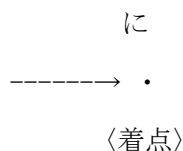


図 10. 「に」のプロトタイプの意味(杉村 2002 より)

菅井(2007)は、「に」の意味役割を研究する時、変化主体が次のような階層で程度差を持って

⁵例文(152)の「から」は「動作主」をマークしていないと説明するため、柴谷(1978:331)は以下の例を挙げた。

彼は人々に金を与えた。花子もそうした。

*彼は人々に良い印象を与えた。花子もそうした。

与格 NP に近づいていて、「一体化」すると述べている。

「近接性」→「到着性」→「密着性」→「収斂性」

図 11. 「に」の一体化の階層(菅井 2007 より)

菅井(2007)によると、意味役割「基準」(比較の基準)を「近接性」で変化主体が与格 NP への一体化を行うと主張し、例「太郎は父親に似て来た」を次のように分析した。容姿や仕草において主格の「太郎」が与格の「父親」に同一の状態に接近している。この解釈から、この意味役割において、主格 NP/対格 NP は与格 NP に抽象的に近づいていくという。この例文から見れば、確かに主格の「太郎」は与格標識「に」がマークしている「父親」に近づくという方向性が見えるが、多くの例では成立しない。例えば、「太郎は次郎に比べて背が高い」の場合、太郎は次郎或いは次郎の身長に近づくわけではない。したがって、「接近性(一体化)」説からの「比較の基準」が持つ方向性に対する解釈は認められない。

本稿は以下の解釈を提案する。まずは、この意味役割を表す例文を見てみよう。

あの子は父親に全然似ていない。(例 63)

太郎は次郎に比べて背が高い。(例 64)

「比較の基準」を表す文には、実は「誰々と比べると/に比べて、結果はなにになに(似ている、背が高い、勝るなど)である」という意味を含んでいる。例(63)、例(64)は以下のように分析できる。

あの子は→父親に比べて→結果:似ていない。

太郎は→次郎に比べて→結果:背が高い。

こう見れば、文の中の方向性が明確になる。確かに「比較の基準」である「父親」は一つ目の矢印の着点であるが、全体的な着点つまり最終の結果ではない。何と言っても、ここの「に」がマークしているのは比較の「結果」ではなくて、その「基準」である。

ここで、典型的な着点性を持つ意味役割の例を見てみるよう。

「接触点(Location of contact)」:壁にカレンダーを張る(例 23)。壁←貼る

「移動の目標(Goal of movement)」:学校に行く(例 15)。学校←行く

「受け手(Recipient of GIVE)」:子供に与える(例 1)。子供←与える

「方向(Direction)」:西に向かう夕日に照らされる(例 13)。西←向かう

いずれにも、「に」がマークしている名詞は矢印の終点に立つので、「着点」といえる。これらの意味役割と比べると、「に」がマークしている「比較の基準」は一定の方向性を持っているが、典型的

な着点ではない。

だから、「比較の基準」を以上の四つの意味役割と同じ水平線におくのが適切ではないと考えるが、一定の着点性も持っているから、この意味役割を少し上に移動させ、中立の領域と着点の領域の中間のところに置いた。

また、「比較の基準」は一定の感情性を持つと考え、少し右に移動させた。例「太郎は次郎に比べて背が高い」において、「に」がマークしている「次郎」は固定の人物で、その身長も客観的事実、感情性を持っていない基準である。だが、以下の例のように、「に」がマークしている「心」という作品は客観的な存在であるが、述語の意味から見れば、基準になるのはその作品の文学的な優劣になる。しかし、その優劣に対する評価は発言者の主観的な判断に基づくものである。

(153)「さて、日本の社会における同性愛的感情のあり方を非常に的確に写しだしたものとして、漱石の「こころ」にまさる文学作品を私は知らない。」(朴 1997)

したがって、「比較の基準」は完全に感情・心理的の領域に属するものではないが、一定の主観性がある役割だと考え、「状態」と「心理的状态」の中間のところに移動させた。

〈11〉「参照点」

「参照点」を少し左に移動し、「状態」と「心理的状态」の中間のところに置いた。「比較の基準」と同じく、「参照点」も客観的な用法も主観的な用法も持っている。例えば、「お酒に強い」においては、どれぐらいは「強い」といえるか、人の主観的な判断によるので、心理的・感情性を示す。一方、「二日に一回の宿直」、「200年に1センチのずれを生じる」は客観的な「参照点」である。そこで、この意味役割も「状態」と「心理的状态」の中間のところに移動させた。

〈12〉「被使役者」

「被使役者」を少し上に移動し、中立の領域に移動させた。

上に移動させた二つ「被使役者」が相当の起点性を持つと考えるからである。例(39)「先生は学生に本を読ませる。」で分析すると、先生は命令を下し、命令を受けた学生は読むという動作をやり始める。この文のプロセスは「先生→学生→読む」である。「に」がマークしている「学生」は「読む」という動作の起点だと考える。それゆえ、「被使役者」は起点性を持っていると思う。

確かに、「被使役者」は使役文における動きの作用・影響を受けるものの側で、使役者から下った命令を受ける方であり、抽象化して「受け手」の一種とも言え、ある意味では「着点性」も持っている。だが、「被使役者」は「受動文の行為者」と同じく元の文の主語であり、動作の実行者である。例

(39)「先生は学生に本を読ませる。」が示すように、「に」がマークしている「学生」は読むという動作の起点であり、元の文「学生は(先生の指示によって)本を読む」の主語である。完全な動作主とは言えないが、少なくとも着点の領域に置くべきものではないと考える。

Rice and Kabata (2007:491-492)は「被使役者」の方向性の位置づけについて、以下のよう

CAUSEES are as much endpoints of coercive verbal transfer as they are starting points of subsequent action. Caught in the middle, they are bound to receive ambiguous treatment linguistically, being neither prototypical goals nor sources.

本稿は Rice and Kabata (2007) が言うように、「被使役者」は典型的な起点ではないし、典型的な着点でもないから、中間の領域に属することに同意する。意味地図上でこの意味役割を少し上に移動させ、中立の領域に置いた。

4.2.3 満州語の「de」にだけある用法の添加

「に」の意味地図を補充・修正してから、満州語の「de」にだけある用法を「に」の意味地図に添加し、最終の意味俯瞰図を作った。以下は「道具」、「期間」、「行動の行われる場所」、「経路」の意味俯瞰図における位置づけを説明する。

〈13〉「道具」

満州語の「de」は「道具」の用法も持っている。抽象化して、「原因」と関連していると考え、意味俯瞰図の中で、「道具」を「原因」と繋ぎ、起点の領域に加えた。両者の関連性を詳しく論述したのは山梨(1993)である。山梨(1993)は以下の表 1 のように、具体例を挙げて、格解釈のゆれの角度から、「道具」と「原因」の間に存在する相対的関連性を説明している。

格解釈の認知的スケール

- 〈具格的〉 1. カギで ドアを あける。
: 2. 片足で 立つ。
: 3. 扇風機で シャツをかわかす。
: 4. モンローの魅力で 観客を惑わす。

〈原因格的〉5. 癌で 死ぬ。

表 1. 格解釈の認知スケール(山梨 1993 より)

例 1 は典型的な具格の例で、下の例 3、例 4 にいくに従って、道具の意味がだんだん弱くなり、原因の意味が強くなる。一方例 5 は原因の意味が一番強く、上に行くに従ってだんだん弱くなるという。この二つの意味役割のゆらぎを示している。

また、3 章で述べたように、「道具」は動作主の操作によって受動者の状態変化を達成させるものなので、より「動作」に近いところに置いた。

〈14〉「期間」

3 章で述べたように満州語の「**de**」は「時点」だけではなく、「期間」の用法も持っている。この意味役割は「**de**」と「に」の差異を表す重要な役割の一つである。「期間」も時間的な位置づけと見、中立の領域に属すると思われる。そこで、意味俯瞰図に、「存在位置」とつなぎ、「時点」に対応させる形で、「期間」を加えた。

また、左右の配置については、事象の行われる経過「期間」は事象の生じる「時点」より動作性のニュアンスが強いので、「時点」は右で、「期間」は左に配置した。

〈15〉「行動の行われる場所」

場所的な用法において、日本語の「に」は静態的「存在位置」だけ表すのに対して満州語の「**de**」は静態的「存在位置」と動態的な「行動の行われる場所」の両方を表すことができる。これも両言語の与格の異同を示す重要なポイントだと考える。また、場所的な用法には起点性も着点性もないため、中立の領域に属すると思われる。意味俯瞰図の中で、「存在位置」と繋ぎ、その左、より「動作」に近いところに「行動の行われる場所」を加えた。

〈16〉「経路」

「経路」は「空間的な経過域」とも言われて(日本語記述文法研 2009)、場所的な用法の一つであり、中立の領域に属すると考える。また、空間移動の経過する場所なので、動態的な「行動の行われる場所」との関連性が高いと考え、「行動の行われる場所」と繋ぎ、「存在位置」より「動作」に近いところに加えた。

4.3 結論

本稿は通言語的な意味俯瞰図を利用し、意味論の角度で日本語の「に」と満州語の「**de**」の意

味・用法を全面的に俯瞰した。両言語の与格の意味俯瞰図から、以下のことが明らかになる。

I. 両言語の与格助詞の意味・用法は「起点」、「中立」、「着点」、「動作性」、「感情性」、「状態」の全ての領域に広がっている。そして、それぞれの領域における意味役割は独立のものではなく、すべて何らかの関連性を持って繋がっている。

ここで注目したいのは、両言語の与格の起点性を持つ用法である。意味俯瞰図から見れば、起点の領域において、「に」と「de」はそれぞれ四つの意味・用法を持っている。

満州語の「de」はそれほど深く分析されていないが、日本語の「に」に関する先行研究は着点性だけを重視する傾向があると思われる。

杉村(2005)は、「に」の意味を次の三つにわけている:「存在の場所・時点」の表示、一方向性を持った動きの着点の表示、被動的行為の動作主の表示。岡(2007)は以下の三つの用法を中心として意味ネットワークを作った:存在の場所、移動の着点、授受の相手。菅井(2007)が主張する「に」の「一体化」理論(「近接性」→「到着性」→「密着性」→「収斂性」)も着点性を中心に分析している。着点、場所は諸説で重視されている一方、起点はおろそかにされる傾向が見える。たとえ「に」の起点性を認めても多くの先行研究が言及するのは「受動文の行為者」だけである。

意味俯瞰図を利用し、より広い視野で「に」の全体像を見れば、「に」は「de」と同じ、着点的な用法、場所的な用法以外に、起点的な用法も発達していることが分かる。「受動文の行為者」の以外、「授与者」、「原因」、「感情の対象」も起点の領域に属する。こちらの起点の用法を無理に着点に分類するより、これを正面から認める必要があると考えられる。

II. 両言語の与格標識はともに様々な用法で用いられるが、満州語の「de」と比べて、日本語の「に」は感情の領域、着点の領域の用法は広い(意味俯瞰図を見ると、日本語の「に」だけが持つ用法の中の「役割」、「結果述語」、「添加」は着点に近い領域に属し、「経験者」、「尊敬の主体」は心理的状态に属する)。一方、満州語の「de」は日本語の「に」より、動的な用法が発達している(意味俯瞰図における満州語の「de」だけが持つ用法の「経路」、「行動の行われる場所」、「期間」は動作の領域に近い)。

5. 終わりに

本稿はまず日本語の「に」と満州語「de」についてのこれまでの先行研究を踏まえ、意味用法を集めた。日本語の「に」の研究は進んでおり、用例を収集するのも簡単だが、先行研究が多すぎて、

さまざまな主張があつて混乱しやすい。丸山(2016)が述べたように、諸説があつて、分析が一致しないものがあつて、典型的なものとなん典型的でないものがあるので、複数のとらえ方ができる場合もある。また、格としての働きか並列助詞あるいは副詞的な働きかも見分けにくい側面もある。これらの問題点について、本稿は意味論の観点から、様々な用法を一番典型的な意味役割に分類した。「原因」と「道具」のような、ある場合に交換できる、いわゆるゆらぎのある意味役割に対しては、意味俯瞰図の中で線「-」で繋ぎ、その関係性を示した。

また、格としての役割かどうか異議のある「添加」、「役割」、「様態」について考察し、以下の結論を出した。「添加」については、安(2017)の観点を認め、つまり「月にむら雲」、「花に風」の「に」は格助詞の「に」とし、「野菜に魚に肉」の「に」は、並立助詞として捉える。「役割」については、丸山(2010)の観点到賛成し、例(113)「お札に手紙を書く」のような文における「に」は副詞的な働きを果たしているとし、例文(115)「秘書に雇う」のような「に」の使い方は、二格の働きをしているとする。「様態」については、副詞的な働きをしているが、与格標識を含むものとして分析した。満州語の「de」が「様態」を表す用法には、体言に与格の要素つけて副詞的な働きを持たせる用法がある。日本語の「に」もこの使い方があるが、「すでに副詞としての資格を持つ語の後ろに付き、副詞的修飾機能を明確にする」という使い方がない。

一方、満州語の「de」の先行研究が「に」のように進んでいないため、先行研究が言及する用法をまとめるとともに、「清文啓蒙」などの文献の中の「de」を抽出し、具体例に基づいて意味用法を分析した。母語話者の確認を得て、「de」の意味用法を明らかにした。その上で、「に」と「de」が持つ用法を対照して研究した。両者の17種の共通する用法と日本語の「に」だけ用いる六つの用法と「de」だけ用いる四つの用法を分析した後、こちらの異同を通言語的な意味俯瞰図で表した。

日本語の「に」と満州語の「de」の意味・用法を全面的に俯瞰することにより、以下のことがわかった。両言語の与格助詞の意味・用法は「起点」、「中立」、「着点」、「動作性」、「感情性」、「状態」の全ての領域に広がっていて、それぞれの領域における意味役割は関連性を持って繋がっている。そして、両言語の与格標識はともに様々な用法で用いられるが、満州語の「de」と比べて、日本語の「に」は感情の領域、着点の領域の用法が広い。一方、満州語の「de」は日本語の「に」より、動態的な用法が発達している。

参考文献

青木怜子(1977)「所謂副詞語尾の「に」について一格助詞の下位分類に及ぶ一」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』松村明教授還暦記念会編. 949-968. 明治書院

- 安祥希(2017)「現代日本語における助詞「に」の研究—並列助詞・接続助詞・複合辞の「に」を中心に」筑波大学学位論文 12102 甲第 7933 号.
- 安双成(1993)『満漢大辞典』遼寧民族出版社.
- 上原久(1960)『満文満州実録の研究』不昧堂.
- 岡智之(2007)「日本語教育への認知言語学の応用:多義語、特に格助詞を中心に」『東京学芸大学紀要:総合教育科学系』58, 467-481.
- 河内良弘(1996)『満州語文語文典』京都大学学術出版会.
- 季永海・劉景憲・屈六生(1986)『満語語法』民族出版社.
- 金啓棕・烏拉熙春(1982)「満語助詞初探」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』1982 年第 1 期, 69-87.
- 姜春之・胡小春(2005)『日本語助詞・助動詞』大連理工大学出版社.
- 胡增益(1994)『新満漢大詞典』新疆人民出版社.
- 国立国語研究所(1997)『国立国語研究所報告 113 日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂.
- 菅井三実(2007)「格助詞「に」の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」『世界の日本語教育. 日本語教育論集』独立行政法人国際交流基金 17, 113-135.
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析—生成文法の方法』大修館書店.
- 杉村泰(2005)「イメージで教える日本語の格助詞と構文」『言語文化論集』第 XXVII 卷, 49—62.
- 水谷静夫(1996)「現代語の格 試論」『計量国語学』20(7),283-303.
- 馬小兵(1997)「「立場・資格」を表す「として」の用法について—「に・で」との比較を中心に—」『筑波日本語研究』2, 89-98.
- 東北師範大学満族歴史言語文化研究中心(2010)『満語語法入門』東北師範大学満族歴史言語文化研究中心.
- 津曲敏郎(2002)『満州語入門 20 講』大学書材.
- 中村渉・佐々木冠・野瀬昌彦(2015)『認知日本語学講座6認知類型論』くろしお出版.
- フィルモア, チャールズ J. (1975)『格文法の原理-言葉意味と構造』田中春美 船城道雄訳. 三省堂.
- 日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法 2.第 3 部.格と構文第 4 部 ヴェイス』くろしお出版.
- 哈斯巴特尔(1998)「満語位格詞綴和モンゴル語与位格詞綴」『満語研究』27, 1-6.

- 朴在權(1997)『現代日本語・韓国語の格助詞の比較研究』勉誠社.
- 益岡隆志・田窪行則(1987)『格助詞』くろしお出版.
- 丸山直子(2010)「助詞「に」を伴う〈役割〉成分—コーパスに基づく分析—」『日本語文法』10(1),71-87.
- 丸山直子(2016)「格助詞「に」と「で」の深層格—出現状況把握に向けての問題点の整理」『東京女子大学 日本文学』112, 175-194.
- 森山新(2008)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』ひつじ書房.
- 山梨正明(1993)「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本語の格をめぐって』仁田義雄(編)39-65, くろしお出版.
- 山本謙吾(1955)「満州語文語形態論」『世界言語概説』下巻. 仁田義雄編.490-536.研究社.
- Sasaki, Kan and Daniela Caluianu (2009) The rise of a semantically unrestricted oblique case in the itsukaido dialect of Japanese, a handout distributed at a conference “Case in and across languages”, at the University of Helsinki.
- Foley, William A. and Robert D. Van Valin (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gorelova, Liliya M. (2002) *Manchu Grammar*. Leiden: E. J. Brill.
- Haspelmath, Martin (2003) The geometry of grammatical meaning: semantic maps and cross-linguistic comparison. In: M. Tomasello(ed.), *The new psychology of language*, vol. 2, 211-243, New York: Erlbaum.
- Narrog Heiko (2008) Varieties of Instrumental. In: Andrej L. Malchukov and Andrew Spencer (ed.) *The Oxford Handbook of Case*,593-599. Oxford : Oxford University Press.
- Palancar, Enrique L. (2002) The Origin of Agent Markers. In: Ricardo Maldonado(ed.), *Studies in Language*. 490-495.Berlin: Akademie Verlag.
- Rice, Sally, and Kaori Kabata (2007) “Crosslinguistic grammaticalization patterns of the ALLATIVE”, *Linguistic Typology*11(3): 451-514.
- モンゴル諸語と満洲語の資料検索システム
<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/manchu/list?groupId=11>

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導を頂いた佐々木冠先生、ご協力を頂いた満州語の母語話者の **Kicengge** 先生、「モンゴル諸語と満州語の資料検索システム」を公開された東北大学東北アジア研究センターの皆様とその貢献者の皆様とに心より感謝致します。そして、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂戴いたしました佐々木ゼミの皆様、アドバイスをくださった満州語を研究している友人たちに深く感謝致します。

また、日本語の文法を直してくださったアカデミックライティングデスクの皆様、これまで温かい目で見守ってくれた友人たちや家族に、深く感謝申し上げます。

目次

1.はじめに.....	0
2.先行研究.....	1
2.1 研究方法に関する先行研究.....	1
2.2 日本語の「に」に関する先行研究.....	5
2.2.1「に」の具体的用法を述べる研究.....	5
2.2.2「に」の用法を構造化した研究.....	6
2.3 満州語の「de」に関する先行研究.....	8
3.日本語と満州語の与格の共通点と相違点.....	9
3.1 共通する用法.....	11
3.2 異なる用法.....	26
3.2.1 日本語の「に」にはあって、満州語の「de」にはない用法.....	26
3.2.2 満州語の「de」にはあって、日本語の「に」にはない用法.....	31
4.意味俯瞰図による分析.....	38
4.1 日本語の「に」と満州語の「de」の意味俯瞰図.....	38
4.2 意味俯瞰図の構成.....	39
4.2.1 いくつかの意味役割の添加.....	39
4.2.2 いくつかの意味役割の位置の調整.....	43
4.2.3 満州語の「de」にだけある用法の添加.....	47
4.3 結論.....	48
5.終わりに.....	49
参考文献.....	50
謝辞.....	53